山口大学埋蔵文化財資料館年報

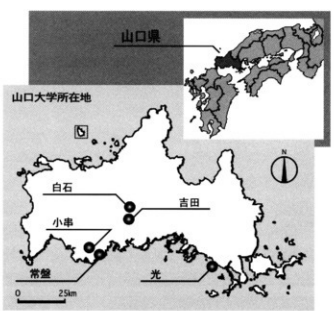
―平成15年度―

2005

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成15年度　山口大学構内遺跡発掘調査概報
平成15年度　山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2005

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学構内の遺跡調査は、山口市の吉田地区と白石地区のほか、宇部市の小串地区と常盤地区に加えて、光市の室積地区の都合、5カ所で実施している。資料館は吉田地区にあるから、とくに場所が離れた遺跡の調査は、埋設管一本の取り扱いをめぐっても、本部と部局への決裁、地元の業者との折衝など、吉田地区の調査よりも段取りに手間がかかるのは事実である。これは大きい大学が決まってかかえる宿命でもあるが、結局、相互理解を基盤として無事、業務を遂行している。

この年報は、埋蔵文化財資料館が実施した発掘調査をはじめ、展示活動、社会教育活動、研究活動まで収録するが、上の一事を取り上げても、関係各位のご指導、ご支援を頂戴して、達成に至ったものである。しかし、いっぽうで新たなる所見の必要性や、検討を要する課題も多く、その点、どうかご高評を切にお願いしたい。

おわりに、学内外の関係機関、ならびに関係者各位から賜ったご協力に厚くお礼申し上げるとともに、今後ともご支援をお願いする次第である。

平成17年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長
中村　友博

例言

1．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」と呼称）が平成15年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。

2．構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畑直彦（平成15年度人文学部助手・平成16年度学術情報機構助手）・横山成己（平成15年度人文学部助手・平成16年度学術情報機構助手）・菊本裕美（事務局本部総務部研究協力課教務補佐員・～平成16年3月30日退職）が担当した。
また、現地での調査に際しては、前田産業株式会社、時盛建設株式会社、社団法人光広域シルバー人材センターに調査協力を依頼した。

3．出土資料の整理は、平成15年度から平成16年度にかけて、資料館員である横山・菊本・神田真理子（事務局本部総務部研究協力課事務補佐員～平成16年3月30日退職）・植木美佳（事務局学術情報部情報サービス課事務補佐員・平成16年4月1日～）が担当した。

4．発掘調査における現地での実測は横山・菊本が、写真撮影は田畑・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を横山が行った。製図・整図は横山・植木・有本浩紀（事務局学術情報部情報サービス課教務補佐員・平成16年4月1日～）が行った。

5．発掘調査に伴う事務は、事務局総務部研究協力課研究協力第2係（平成15年度当時）が統括した。

6．発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。

7．本文の執筆分担は目次に記した。

8．本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

凡例

1．山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、そのいずれもが埋蔵文化財保護法（法律第214号）で示されるところの「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置している。山口大学各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡　　白石構内～白石遺跡　　小串構内～山口大学医学部構内遺跡
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡　　光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2．吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA－24区南西隅を起点（構内座標x＝0，y＝0）とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X，Y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

x＝X＋206，000
y＝Y＋64，750

3．各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居……SB　　土壙……SK　　溝……SD
柱穴・ピット……Pit　　落ち込み……SX

4．本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

5．標高数値は海抜標高を示す。

6．土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

7．遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器
断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

本文目次

第1章　平成15年度山口大学構内遺跡の調査……1
第1節　平成15年度に実施した遺跡調査の概要……(横山)……1
第2節　吉田構内(吉田遺跡)の調査……(田畑)……4
1　農学部附属農場ガス管漏洩修理工事に伴う立会調査……4
2　教育学部附属養護学校給食調理員専用トイレ新設工事に伴う立会調査……5
3　農学部環境観測実験棟南側温室土中の機器搬出工事に伴う立会調査……5
4　理学部中庭通路屋根新設に伴う立会調査……6
5　理学部中庭あずまや新設工事に伴う立会調査……6
6　基幹環境整備(外灯新設)工事に伴う立会調査……7
第3節　白石構内(白石遺跡)の調査……(田畑)……9
教育学部附属山口幼稚園庇新設、山口小学校スロープ新設に伴う立会調査……9
第4節　小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査……(横山)……10
基幹・環境整備(煙突)工事に伴う試掘調査……10
第5節　常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査……(田畑)……13
工学部本館改修工事に伴う立会調査……13
第6節　光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査……(横山)……14
教育学部附属光小学校エレベータ昇降路他新設に伴う試掘・立会調査……14
第7節　その他構内の調査……(田畑)……33
ボート部合宿所給排水整備工事に伴う確認調査……33
付節1　平成15年度　山口大学構内遺跡調査要項……34
付節2　山口大学構内の主な調査……36

第2章　平成15年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告……(横山)……56
第1節　資料館における展示・公開活動……56
第2節　資料館における社会教育活動……57
第3節　その他の活動……59

付篇　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物……(横山)……60

挿図目次

第1章第1節　平成15年度に実施した遺跡調査の概要

図1　山口大学吉田・白石構内位置図 ……2

図2　小串・常盤構内位置図 ……3

図3　光構内位置図……3

第1章第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

図4　調査区位置図……4

図5　調査区位置図……5

図6　調査区位置図……5

図7　調査区位置図……6

図8　調査区位置図……6

図9　調査区位置図……7

第1章第3節　白石構内（白石遺跡）の調査

図10 調査区位置図……9

第1章第4節　小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

図11 調査区位置図……10

図12 調査区土層断面図……11

第1章第5節　常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査

図13 調査区位置図……13

第1章第6節　光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査

図14 調査区位置図……14

図15 A調査区第1遺構面平面図・土層断面図…17

図16 A調査区第2遺構面平面図・断面図……19

図17 A調査区第3遺構面平面図 ……19

図18 A調査区第3遺構面遺構断面図 ……19

図19 A調査区第1遺構面出土遺物実測図 ……24

図20 A調査区第2遺構面・第2層出土遺物実測図 ……26

図21 B調査区断面図・第2遺構面平面図……29

図22 B調査区第2遺構面出土遺物実測図 ……29

図23 C調査区出土遺物実測図……31

第1章第7節　その他構内の調査

図24　調査区位置図 ……33

第1章付節　山口大学の主な調査

図25 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図 ……49・50

図26 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図……51

図27 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図 ……52

図28 山口大学小串構内調査区位置図……53

図29 山口大学常盤構内調査区位置図……54

図30 山口大学光構内調査区位置図……55

付篇　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物

図31 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物①（中学校体育館包含層出土遺物）…64

図32 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物②……65

図33 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物③……66

図34 御手洗遺跡・月待山遺跡主要調査位置図 ……75

図35 御手洗遺跡・月待山遺跡主要調査地土層柱状図……77

写真目次

第1章第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

写真1　C地点土層断面……4

写真2　D地点土層断面……8

写真3　H地点土層断面……8

第1章第3節　白石構内（白石遺跡）調査

写真4　E地点土層断面……9

第1章第4節　小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

写真5　調査前全景 ……11

写真6　調査区全景 ……11

写真7　調査区東壁土層断面 ……11

写真8　調査区北壁土層断面 ……11

第1章第5節　常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査

写真9　B地点土層断面……13
第1章第6節　光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査
写真10 A調査区調査前全景……14
写真11 B調査区調査前全景……14
写真12 A調査区南西部北西壁土層断面……15
写真13 A調査区中央部北西壁土層断面……15
写真14 A調査区中央部第1遺構面遺構検出状況……20
写真15 A調査区南西部第1遺構面完掘状況 …20
写真16 A調査区中央部第1遺構面完掘状況 …20
写真17 A調査区中央部第1遺構面完掘状況 …20
写真18 A調査区南西部第2遺構面完掘状況 …20
写真19 A調査区中央部第2遺構面完掘状況 …20
写真20 A調査区第2遺構面SK1土層断面 ……20
写真21 A調査区第2遺構面SK4土層断面 ……20
写真22 A調査区中央部第3遺構面完掘状況 …21
写真23～33 第3遺構面Pit半裁状況……21
写真34 A調査区第1遺構面出土遺物 ……25
写真35 A調査区第2遺構面・第2層出土遺物 …26
写真36 B調査区南西壁土層断面……28
写真37 B調査区第2遺構面遺構完掘状況 ……28
写真38 B調査区出土遺物……29
写真39 C調査区出土遺物……31
写真40 C調査区遺構完掘状況……31
写真41 C調査区土層断面……31
第1章第7節　その他構内の調査
写真42 ボート部合宿所全景 ……33
第2章第1節　資料館における展示公開活動
写真43 第19回企画展ポスター ……56
写真44 第19回企画展の展示模様……56
第2章第2節　資料館における社会教育活動
写真45 土器の拓本に挑戦！……57
写真46 昔の生活を想像して絵を描こう……57
写真47 傑作のできあがり ……57
写真48『山口ふるさと大学』での講演風景 ……58
写真49 遺跡保存公園を見学……58
写真50 平川小学校での授業風景……59
写真51 土器にふれる平川小学校生徒……59
第2章第3節　その他の活動
写真52 展示を見学する学芸研究士……59
付篇　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物
写真53 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物①……67
写真54 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物②……68
写真55 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物③……68
写真56 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物④……69
写真57 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物⑤……70
写真58 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物⑥……71

表目次

第1章第1節　平成15年度に実施した遺跡調査の概要
表1　平成15年度山口大学構内遺跡調査一覧表……1
第1章第6節　光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査
表2　A調査区第1遺構面遺構観察表 ……16
表3　A調査区第2遺構面遺構観察表 ……18
表4　A調査区第3遺構面遺構観察表 ……22
表5　出土遺物（土器）観察表 ……27
表6　出土遺物（石器）観察表 ……27
表7　C調査区遺構観察表……30
第1章付節2　山口大学構内の主な調査
表8　山口大学構内の主な調査一覧表……36～48
第2章　山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告
表9　埋蔵文化財資料館利用者の推移……56
付篇　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物
表10 光市文化センター所蔵御手洗遺跡出土遺物観察表……72

第1章　平成15年度山口大学構内遺跡の調査

第1節　平成15年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市（吉田・白石構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の中に位置している。各構内の様相を概略すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落として県内でも著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落・遺物散布地である御手洗遺跡・月待山遺跡内に位置している。

このような環境の中、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内の埋蔵文化財を保護・活用する施設として、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体（山口県および各市）の指導により、埋蔵文化財保護の立場から事前・試掘・立会の三種の方法で調査を厳密に行っている。これらの法に基づいた調査以外でも、「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する一部の大学関連施設（職員宿舎等）敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合には、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して資料館が確認調査を行っている。

また、山口大学内には埋蔵文化財資料館運営委員会（平成15年度当時）が組織されており、試掘調査等で埋蔵文化財が確認された場合は、埋蔵文化財のさらなる現状変更を避けるため工事計画の変更等を審議している。

上記の調査体制の下、資料館が平成15年度に実施した埋蔵文化財の調査は、下記のように試掘調査2件、立会調査9件、確認調査1件の計12件である。

表1　平成15年度山口大学構内遺跡調査　一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積(㎡)	調査期間	本書掲載頁
試掘	基幹環境整備（埋突）	小串		76	8月1日～8月20日	10～12
試掘立会	教育学部附属光小学校エレベータ昇降路等新設	光		169	11月20日～12月24日、1月22・28・29日、2月9・10日、3月4日	14～32
立会	農学部附属農場ガス管漏洩修理（緊急）	吉田	OP-16、Q-15	12	11月25・26日	4
	教育学部附属養護学校給食調理員専用トイレ新設	吉田	C-21	1.7	1月16日	5
	農学部環境観測実験棟南側温室土中の機器搬出	吉田	P・Q-15	52	1月27日	5
	理学部校舎中庭通路屋根新設	吉田	N-19	5.8	2月12日	6
	理学部中庭あずまや新設	吉田	N-19	6.8	2月23日	6
	基幹環境整備（街灯新設）	吉田	F-19、G-13～15・18、H-14、I-16・19、L-12、Q-15	11.5	2月27日、3月19・23日	7、8
	教育学部附属山口幼稚園並新設 山口小学校スロープ新設	白石		27.7	1月26日、2月12日	9
	工学部本館改修	常盤		428	7月25日、11月13・23日	13
確認	ボート部合宿所給排水整備	その他		80	2月16・18日	33

吉田構内（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部：山口市大字吉田1677−1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

立会調査6件を実施した。

農学部附属農場ガス管漏洩修理工事に伴う立会調査・基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査では、遺物の出土はみられなかったものの、旧河川の埋土と考えられる土層を確認した。

農学部附属農場周辺では、過去の調査により縄文時代晩期の旧河川、古代の旧河川が検出されている。埋土中には当該期の遺物が多量に含まれており、吉田遺跡の古環境を復元する上で重要な資料となっている。

一方基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査では、陸上競技場北側、体育館周囲、教育学部周囲の調査地点で旧河川もしくは遺構の埋土と考えられる土層が検出された。これらの調査地点の旧地形は谷状地形もしくは低地部であったものと考えられ、山口大学の吉田構内統合移転時に包含層および遺構面の撹乱をあまり受けていないため、埋蔵文化財が良好に残存している可能性が高い。

両立会調査地点周辺地での今後の施設整備等開発事業には、埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

図1　山口大学吉田・白石構内位置図

その他の立会調査では、埋蔵文化財は確認されなかった。

白石構内（教育学部附属山口幼稚園：山口市白石3丁目1−2、同山口小学校：白石3丁目1−1、同山口中学校：白石1丁目9−1所在）

立会調査1件を実施した。

教育学部附属山口小学校スロープ新設に伴う立会調査では、遺物包含層の可能性がある堆積層が確認された。遺物の出土はなかったが、調査地点の南側では、過去の調査により遺物包含層、弥生時代の可能性が高い竪穴住居跡、古墳時代の土壙などが検出されており、今後とも埋蔵文化財の保護に注意が必要な地点と言える。

小串構内（医学部、同付属病院：宇部市南小串1丁目1−1）

試掘調査1件を実施した。

基幹環境整備（煙突）工事に伴う試掘調査は、エネルギーセンター棟西側地点を対象地として行ったが、旧海岸域の堆積層と考えられる砂層から土師器小片が出土したものの、良好な遺物包含層および過去の生活面等は確認されなかった。今回の調査と過去の調査成果から、調査地点周辺（小串構内南西部）では埋蔵文化財が存在する可能性は低まったと言える。

常盤構内（工学部：宇部市常盤台2丁目16−1、尾山宿舎：同上野中町2658−3所在）

立会調査1件を実施した。

工学部本館改修工事に伴う立会調査では、造成

図2 小串・常盤構内位置図

土下に地山を確認したが、遺構・遺物など埋蔵文化財は検出されなかった。調査成果から、本館付近は構内造成時の削平が激しく、過去に埋蔵文化財が存在していたとしても現状では消失しているもの判断される。しかしながら、常盤構内では過去にナイフ形石器が出土しており、また常盤構内の東には旧石器時代の遺物散布地として県内でも著名である常盤池遺跡が所在するため、構内各所今後とも継続的な調査が必要と言える。

光構内（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市室積8丁目4番1号）

試掘調査1件、立会調査1件を実施した。

教育学部附属光小学校校舎北側北西面で行ったエレベータ新設地点での試掘調査では、3面におよぶ遺構面が確認された。各遺構面の状況としては、第1遺構面では近世～近代にかけての遺構・遺物が、第2遺構面では古墳時代中期から後期と考えられる遺構・遺物が、第3遺構面では時期不明であるが柱穴と考えられる遺構が検出された。現地表面から各遺構面までの深度は、第1遺構面が25㎝、第2遺構面が40㎝、第3遺構面が70㎝であった。

この調査により、小学校校舎周辺では現地表下の非常に浅い地点に埋蔵文化財が埋存していることが明らかとなった。そのため、立会調査となった地点でも慎重な地下掘削を行ったところ、遺構面および遺物を検出するに至った。

今回の調査により、光構内には少なくとも3時期におよぶ遺構面が残存することが確認された。光構内の立地が前面に海岸を、背後に丘陵を有していることから、旧地形の復元には慎重を要する。今後とも施設整備計画等掘削を伴う工事計画には慎重な対応が必要である。

図3 光構内位置図

第2節　吉田構内(吉田遺跡)の調査

1．農学部附属農場ガス管漏洩修理工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内O・P－16、Q－15区

調査期間　平成15年11月25・26日

調査面積　約12㎡

調査担当　田畑直彦

調査結果　農学部附属農場へガスを供給しているガス管が漏洩した。このため、急遽漏洩箇所の復旧工事が行われることとなった。漏洩箇所を確定するために、A～C地点の3ヶ所で掘削してガス管を検出することとなり、工事に際して立会調査を実施した。

図4　調査区位置図

写真1　C地点土層断面（北東から）

A地点では、現地表下約34㎝までは統合移転時の造成土であった。約34～66㎝が青灰色シルト(オリーブ灰色シルトが混じる)、約66～88㎝がオリーブ黒色シルト、約88㎝から掘削深度の130㎝までは青灰色シルトで、これらは河川の埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。調査地の東側の実験水田では、農学部バイオ環境制御実験施設新営に伴う発掘調査で古代の河川が検出されており、同一の河川である可能性がある。

B地点では、現地表下約90㎝まで掘削したが、造成土の範囲内であった。調査地東側の道路造成による埋土と考えられる。

C地点では、現地表下約200㎝まで掘削したが、大部分は造成土の範囲内であった。しかし、西側の一部の箇所では、現地表下約60㎝で緑灰色粗砂を検出し、掘削深度の110㎝まで同層が続いていることを確認した。河川の埋土と考えられる。遺物は出土しなかった。調査地の東側の農学部連合獣医学科棟の敷地では、縄文時代晩期の河川、北側のボイラー室周辺では、古代の河川が検出されており、これらに関連した河川である可能性がある。

2．教育学部附属養護学校給食調理員専用トイレ新設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内C－21区

調査面積　約1.7㎡

調査期間　平成16年1月16日

調査担当　田畑直彦

調査結果　教育学部附属養護学校にトイレを新設するのに伴って、新たに排水管を布設することとなった。工事による掘削は幅約70㎝、長さ約2.4mで、深さは現地表下約50㎝であった。調査の結果、掘削は造成土の範囲内で埋蔵文化財への支障はなく、工事は続行された。

このように掘削は小規模のため、埋蔵文化財に支障はなかったが、調査地の北側では平成11年度に行った給食室増築に伴う試掘調査で、縄文時代の河川、弥生時代の土坑などが確認されており、今後も埋蔵文化財の保護に十分注意を払う必要がある。

図5　調査区位置図

3．農学部環境観測実験棟南側温室土中の機器撤出工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内P・Q－15区

調査面積　約52㎡

調査期間　平成16年1月27日

調査担当　田畑直彦

調査結果　農学部環境観測実験棟南側に位置する温室の地下に埋設された機器の撤去が計画された。しかし、設置当時の関係者がおらず、埋設位置が不明であった。そこで、温室を撤去し、東西約6.5m、南北約8mの敷地全体を対象に、掘削により機器の埋設箇所を確認して撤去することになった。

調査の結果、現地表下約25㎝までは表土、約25～65㎝までは造成土、現地表下約65㎝から掘削深度である75㎝までは、統合移転前の水田耕土であるオリーブ色粘質土であった。このため埋蔵文化財に支障はなく、工事は続行された。

図６　調査区位置図

4. 理学部中庭通路屋根新設に伴う立会調査

図7 調査区位置図

調査地区 吉田構内N－19区
調査面積 約5.8㎡
調査期間 平成16年2月12日
調査担当 田畑直彦
調査結果 理学部中庭の通路屋根について、北側と南側の校舎間の未設置箇所に新設が計画された。このため、支柱部分の北西側のA地点、北東側のB地点、南西側のC地点、南東側のD地点の4ヶ所、それぞれ120cm×120cmの範囲について立会調査を行った。

A・B地点は現地表下約65cmまでが校舎の基礎、約65～95cmまでがバラス、約95～120cmまでが地山であるオリーブ灰色シルトであった。C・D地点では、現地表下約70cmまで掘削したが、いずれも造成土の範囲内であった。

5. 理学部中庭あずまや新設工事

図 8 調査区位置図

調査地区 吉田構内N－19区
調査面積 約6.8㎡
調査期間 平成16年2月23日
調査担当 田畑直彦
調査結果 理学部中庭にあずまやの新設が計画された。このため、支柱部分の北西側のA地点、北東側のB地点と南西側のC地点、南東側のD地点の4ヶ所、それぞれ130cm×130cmの範囲について立会調査を行った。

その結果、現地表下約84cmまでが造成土、約84～93cmが統合移転前の水田耕土である灰色シルト、約93～110cmが水田床土であるオリーブ灰色シルトであった。このため埋蔵文化財に支障はなく、工事は続行された。

6．基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　F－16、G－13～15・18、H－14、I－16・19、J－19、L－12、Q－15区

調査面積　約11.5㎡

調査期間　平成16年2月27日、3月19日、23日

調査担当　田畑直彦

調査結果　平成7年度以来、吉田地区基幹環境整備の一環として、毎年度計画的に構内の外灯が新設されてきている。本年度は排水処理センターから陸上競技場までの道路沿いに3基、陸上競技場の北側に1基、体育館の周囲に2基、教育学部の周辺に3基、本部裏の牧草地に1基、農学部環境観測実験棟の北側に1基、合計11基の外灯の新設が計画された。この工事に伴い、外灯が新設されるA～K地点で、各々基礎部分の約100㎝×100㎝の範囲について立会調査を行った。

A～C地点は、排水処理センターから陸上競技場までの道路沿いに新設された外灯基礎部分の調査地点である。A地点は、現地表下約13㎝までが表土、約13～128㎝が造成土、約128～137㎝が水田耕土ないし床土、約137～160㎝が緑灰色シルトの地山となる。B地点は、現地表下約15㎝までが表土、約15～106㎝までが造成土、約106～120㎝が水田耕土ないし床土、約120～150㎝が緑灰色シルトの地山となる。C地点は現地表下約120㎝まで掘削したが、全て調査地の西側に布設されている排水溝布設時の造成土であった。

D地点は、陸上競技場の北側に新設された外灯基礎部分の調査である。現地表下約20㎝が表土、約20～47㎝が造成土、約47～67㎝が水田耕土ないし床土である。以下は河川埋土と考えられる。約67～8

図9　調査区位置図

3cmが緑灰色シルトで、弥生時代以降の遺構面の可能性がある。約83～119cmが灰色粗砂、約119～140cmが茶褐色シルトであった。遺物は出土していない。

E・F地点は体育館の周囲に新設された外灯基礎部分の調査である。E地点は現地表下約11cmがアスファルトの路面、約11～105cmが造成土、約105～126cmが水田耕土ないし床土であった。以下は河川埋土と考えられ、約126～161cmが黒褐色シルト、約161～170cmが灰色粗砂であった。遺物は出土していない。F地点は現地表下約132cmまでが造成土、約132～141cmが河川ないし遺構埋土と考えられる黒褐色シルト、約141～155cmが茶褐色粘質土の地山であった。遺物は出土していない。

G～I地点は教育学部の周囲に新設された外灯基礎部分の調査である。G地点は現地表下56cmが造成土、約56～67cmが水田耕土、約67～75cmが水田耕土であった。以下は河川埋土と考えられ、約75～106cmがオリーブ灰色粗砂、約106～128cmが淡黄色粗砂、約128～148cmがオリーブ灰色粗砂であった。遺物は出土していない。H地点は、現地表下約34cmが表土、約34～84cmが造成土、約84～96cmが水田床土であった。以下は河川埋土と考えられ、約96～130cmが青灰色粗砂、約130～156cmが黒褐色シルト・灰色シルトの互層で土器細片が出土した。I地点は現地表下約30cmが表土、約30～66cmが造成土、約66～86cmが河川堆積土である黒褐色粘土(青灰色シルトのブロックを含む)、約86～100cmが河川堆積土である灰色粗砂であった。以下は地山で約100～113cmが青灰色シルト、約113～150cmが青灰色粗砂であった。

J地点は本部裏の牧草地に新設された外灯基礎部分の調査である。現地表下約97cmが表土・造成土で、約97～120cmが水田耕土、約120～140cmが水田床土であった。これと同一レベルで水田暗渠を検出した。造成土から磁器小片が出土した。

I地点は農学部環境観測実験棟の北側に新設された外灯基礎部分の調査である。現地表下約40cmが表土、約40～82cmが造成土、約82～105cmが水田床土、約105～150cmが青灰色シルトの地山であった。

以上、今回の調査では広範囲にわたる地下の土層を確認することができた。ほとんどの調査地点では造成土が厚く、統合移転時の造成による削平をほとんど受けていないことが判明した。また、今回の調査地の多くは谷状地形ないし低地部に位置するため、D・E、G～I地点では時期不明であるが河川を検出し、F地点では、河川ないし遺構埋土と考えられる土層を検出した。これらの調査地周辺の既往の調査でも溝や河川が検出されており、今後の施設整備にあたっては、埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

写真2　D地点土層断面（東から）

写真3　H地点土層断面（東から）

第3節　白石構内(白石遺跡)の調査

教育学部附属山口幼稚園庇新設、山口小学校スロープ新設に伴う立会調査

調査地区　白石構内
調査面積　約27.7㎡
調査期間　平成16年1月26日、2月12日
調査担当　田畑直彦
調査結果　教育学部附属山口幼稚園園舎北側で庇の新設工事、山口小学校北側の3ヶ所についてスロープ新設工事が計画され、立会調査を行った。

山口幼稚園庇新設工事では、庇の支柱部分であるA地点、B地点で60cm×52cmの範囲について調査を行った。両地点とも現地表下約10cmがマサの表土で、以下掘削深度である約40cmまで造成土であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

山口小学校スロープ新設工事では、C～E地点について調査を行った。C地点は1.5m×7.8mの範囲について調査した。調査地の大部分が攪乱を受けていたが、東北隅で土層を確認した。現地表下約10cmが表土、約10～30cmが造成土、約30～50cmが淡黄色シルトの地山であった。D地点は1.5m×5.1mの範囲について調査した。現地表下約30cmが表土、約30～45cmが造成土、約45～60cmが水田耕土、約60～70cmが水田床土であった。E地点は東半部と西端部が攪乱を受けていた。現地表下約5cmが表土、約5～20cmが造成土、約20～35cmが水田床土であった。以下は、約35～50cmが灰色シルト、約50cm以下が灰色粗砂であった。両層から遺物は出土しなかったが、約8.5m南側の地点で遺物包含層が確認されていることから、これに関連する遺物包含層である可能性がある。

図10　調査区位置図

写真4　E地点土層断面（南から）

第4節　小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査

基幹・環境整備(煙突)新営に伴う試掘調査

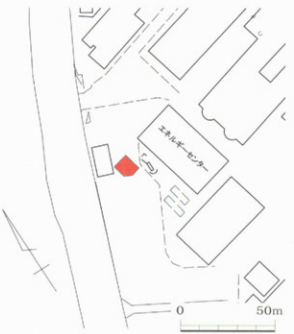


図11　調査区位置図

調査地区　小串構内エネルギーセンター棟西側、剖検棟との間の空閑地
調査面積　76㎡
調査期間　平成15年8月1日 ー 8月20日
調査担当　横山成己
調査結果

(1)調査の経過(図11、写真5)

小串構内エネルギーセンター棟の既設煙突の老朽化に伴い、煙突の新営が計画された。新営煙突は地下2.8mにおよぶ基礎掘削工事を伴う計画であった。この計画地周辺の埋蔵文化財の状況としては、北東方向に近接する地点で昭和59年に資料館により実施された医学部環境整備に伴う試掘調査では、古代から近世にかけての遺物が含まれる堆積層が確認されている[1]が、同年南方向に近接する地点で実施された医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査では埋蔵文化財は確認されなかった[2]。したがって計画地点での埋蔵文化財の有無は不明確な状況と言わざるを得ず、埋蔵文化財資料館運営委員会の判断に基づき、文化財保護法の下に試掘調査を行うこととなった。

新営煙突の基礎平面形態は正八角形であり、工事計画も八角形の範囲で掘削を行うとのことであったが、埋蔵文化財調査においては直線的に土層断面を確認する方法がより有効であるため、1辺を9mとする正方形を基本的な調査範囲として設定した。しかしながら、調査区の南西部に関しては、隣地との境界塀が存在するために、調査の安全上掘削範囲を縮小させた。したがって、調査区の平面形は五角形を呈している。

(2)基本層序(図12・写真6～8)

調査の結果確認された基本層序は、調査区北側壁面で述べると、

第1層…鉱滓(約25cm)
第2～6層…造成土(約175cm)
第7層…ボタ土(約15cm)
第8層…緑灰色(7.5GY6/1)粘性砂(約40cm)

である。第8層に関しては土質が脆弱であったため、現地表下2.2m(標高0.3m)まで掘削したところで調査の安全上掘削を中止した。部分的にさらに約1m掘り下げたが、土質に変化は見られなかった。

(3)遺構および遺物

遺構は検出されなかった。遺物としては、第8層から自然木とともに土師器の小片2点が出土している。いずれも1cm以下の破片であり、器種および時期は不明である。

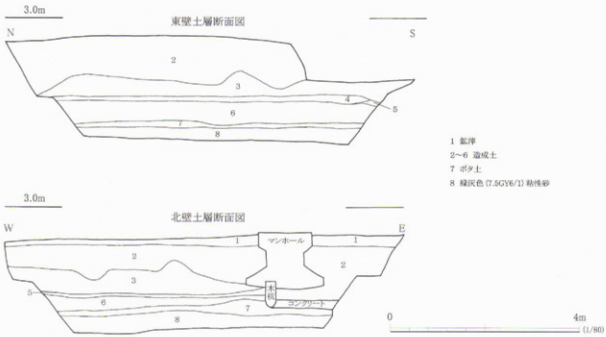


図 12 調査区土層断面図

写真 5 調査前全景（南東から）

写真 6 調査区全景（東から）

写真 7 調査区東壁土層断面（西から）

写真 8 調査区北壁土層断面（南から）

(4)小結

今回の調査では、医学部の旧霊安室の基礎と考えられる木杭が17本検出されたことを除いては、遺構の確認はできなかった。基本層序第7層までは無遺物層であったが、第8層からは自然木などの植物遺体とともに、極少量ではあるが土師器の小片が出土している。小片であるためこれらの遺物の器種・所属時期に関しては推定できないが、植物遺体とともに砂中に混入している状況から見て、小串構内北方の低丘陵付近からの流入であろうか。

今回の調査以前には、小串構内西部における発掘調査例は少なく、近接地の調査としては前述したように昭和59年に実施された医学部基幹整備に伴う試掘調査、医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査があるにすぎない。その調査では、本調査の基本層序第8層(緑灰色粘性砂)と同一層と推測される土層(基幹整備Aトレンチ調査における灰色粘土混じり砂、臨床講義棟・病理解剖棟調査における青灰色混砂粘質土(植物遺体含む))が確認されている。いずれも層上面の標高がほぼ0.7mで一致していることから、同一層と見て問題ないようである。また、昭和59年の調査では、この層中から汽水性の巻貝、二枚貝が検出されている。以上の状況から見ると、小串構内の西部に関しては過去において河口付近の海岸域であった可能性が極めて高い。

現在山口大学小串構内は、宇部市域を南北に流れる真締川の右岸に面して所在している。この真締川は、古くは小串構内の南端部、樋ノ口橋で流れを西に向け、助田町(現JR居能駅南側)付近を河口としていたようである。「舟木宰判本控」に所収されている末ノ二月(寛政11年(1799)2月)の「御届申上候事」には、「宇部村福富前殿領本川筋砂余分流出、川尻は遠干拓にて砂引不申、次第ニ川内高相成、洪水之筋は勿論地道ニても川筋の田地余分水損有之、年々御所務落猶百姓迷惑不大形儀ニ付、川尻を床海之所に付替被申付度、ー」と記されている。本川(真締川)が上流から運んできた土砂で河口が埋まってしまい、洪水被害が大きいので、河口を付け替えさせてほしいという内容である。また、同文書中には、河口付け替え工事の結果、「ー弥水砂共ニ引宜ニ付、只今迄之川をは川尻留被申附候、ー」とあり、付け替え工事によって川の流れが良くなったので旧河口を封鎖して耕地にしたいと萩藩に願い出ている[3]。

現在の樋ノ口橋から助田町までの直線距離はおよそ2kmであり、河口からの洪水被害がどの程度の範囲に広がりを見せていたのかという問題は、現状では周辺城の発掘調査例が少ないため当時の旧地形の復元は困難である。少なくとも小串構内の南西部に関しては18世紀以前は陸上生活地ではなかった可能性が高いと言えるのではなかろうか。

しかしながら、密度は希薄であるが遺物を包含する土層が確認されるため、小串構内北方の丘陵地には集落遺跡が存在する可能性が残っている。埋蔵文化財確認調査の継続は不可欠であろう。

[註]

1)森田孝一(1986)「第4章　宇部(小串構内)医学部基幹整備に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口

2)森田孝一(1986)「第5章　宇部(小串構内)医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口

3)小川国治(1992)「第4編近世第3章近世村落の成立と発展」,宇部市史編集委員会(編)『宇部市史通史篇』上巻,宇部(山口)

第5節　常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査

工学部本館改修工事に伴う立会調査

調査地区　常盤構内

調査期間　平成15年7月25日、11月13・23日

調査結果　工学部本館改修工事に伴い、建物の改修工事と配管工事が計画された。建物改修工事は耐震対策として、建物周囲、東・西・南側に外壁を新設するもので、東側は幅約2m、長さ約14m、南側は幅約4m、長さ約85m、西側は幅約2m、長さ約7mの範囲で掘削が行われた。A地点は現地表下約120cmが造成土で、約120～170cmが地山である黄褐色粘質土であった。B地点では、現地表下約140cmが造成土、約140～170cmが地山である黄褐色粘質土で、A地点以北とC地点以西では撹乱が激しく、掘削基底面である現地表下170cmで、部分的に地山を確認したのみである。また、建物南側では、ロータリー新設に伴い本館と噴水の間の2ヶ所について、柱の基礎部分として2m×2mの範囲、2ヶ所について現地表下約90cmまで掘削が行われた。しかし、いずれも造成土の範囲内であった。

配管工事については、光ケーブル新設工事に伴い、メディア基盤センター西側で幅約1m×長さ約4mの範囲、排水管新設工事に伴い、噴水の東西2ヶ所について幅約1m、長さ約15mの範囲で掘削が行われた。現地表下約50～80cmまで掘削した結果、D地点でのみ、現地表下約55～75cmで黄褐色粘質土の地山を確認した。

以上により、本館付近は構内造成時の削平が激しいことから、過去に埋蔵文化財が存在したとしてもすでに消失していると考えられる。

調査面積　約428㎡

調査担当　田畑直彦

図13　調査区位置図

写真9　B地点土層断面（北東から）

第6節　光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

教育学部附属光小学校エレベータ昇降路等新設に伴う試掘調査・立会調査

図14　調査区位置図

調査地区　光構内小学校校舎周囲
調査面積　169㎡
調査期間　平成15年11月20日～12月24日、
平成16年1月22・28・29日、2月9・10日、
3月4日
調査担当　横山成己
調査結果

(1)調査の経過(図14、写真10・11)

教育学部附属光小学校に身障者用施設設置の必要性が生じたため、身障者用エレベータ、玄関スロープ、身障者用便所の新営、またそれに伴い給排水設備の改修工事が計画された。これらの開発予定地の内、エレベータおよびエレベータを迂回する給排水設備部分(A調査区)については、その近接地で平成2年に資料館が実施した光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査により、6世紀から7世紀代にかけての遺構が2層にわたり検出されていることから、埋蔵文化財が埋存している可能性が高いと推測された。[11]一方身障者用便所予定地(B調査区)は小学校校舎の建設工事により大きく撹乱を受けているものと予想され、また玄関スロープ予定地(C調査区)は掘削深度が浅いため埋蔵文化財の保護上問題がないものと予想された。

以上の経過を経て、埋蔵文化財資料館運営委員会の審議・判断に基づき、文化財保護法の下にA地区は試掘調査を、B・C地区に関しては立会調査を実施することとなった。

(2)A調査区

A調査はエレベータ新設予定地であり、開発掘削深度がもっとも深くなる地点である。光構内が海浜部の砂質土層および砂層上に立地していることもあり、調査掘削中の壁面崩落の危険性が想定されたため、調査区を3分割して掘削を行い、終了カ所から順次埋め戻すことで調査の安全を維持することとなった。

写真10　A調査区調査前全景(北から)

写真11　C調査区調査前全景(東から)

a. 基本層序(図15、写真12・13)

A調査区の基本層序は、調査区北西壁を基準として、

第1層…表土(層厚約15cm)

第2層…褐色(7.5YR4/6)砂質土※1～3cmφの小礫多く含む(層厚約20cm) ー 第1遺構面の検出層

第3層…黄褐色(10YR5/6)砂礫※0.5～4cmφの小礫多量に含む(層厚約30cm) ー 第2遺構面の検出層

第4層…にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂※砂粒0.5cmφと褐色(10YR4/4)細砂※0.5～5cmφの小礫多量に含むの互層(層厚約50cm) ー 第3遺構面の検出層

第5層…青灰色(5PB6/1)細砂※0.5～2cmφの小礫多く含む(層厚約30cm)

第6層…明青灰色(5PB7/1)細砂※0.5～2cmφの小礫少量含む(層厚40cm以上)

である。この内、第1遺構面検出層である第2層は調査区全域で確認されたが、第2遺構面検出層である第3層および第3遺構面検出層である第4層は、調査区北東側(海岸側)で消滅する。これは、海岸域の浸食作用によって消滅しているものと考えられる。

また、第2層はその層中に遺物を含む遺物包含層となっている。そもそも光構内に遺跡が埋存していることが明らかとなったのは、昭和40年に実施された附属中学校の建築工事中のことである。その調査の記録を見ると、工事掘削中に縄文時代から中世にわたる遺物が包含されている層が検出されたのであるが、「包含層は黒褐色の海成砂礫層である。なお、包含層の上下共に海成の砂礫層であるが色が黄茶褐色、黄褐色、褐色等の層をなしているので、包含層との区別は明瞭であった。」と記述されている[32]。中学校体育館はA調査区の東約90mに位置しているが、ここで記されている遺物包含層と今回検出した遺物包含層は堆積層の特徴から見ると性格を異にするもののようである。

一方、今回の調査地から西に約30mの地点で平成2年に実施された光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査での基本層序を見てみると、

第1層…表土(層厚約30cm)

第2層…褐色(10YR4/5)砂質土(層厚約20～40cm)～遺構検出層

第3層…明黄褐色(2.5Y6/6)細砂～遺構検出層

となっており、調査の結果この第2層は5世紀前半～7世紀代初頭の時期幅を有する遺物包含層であることが確認されている。

この層序および遺物包含層の性格は、A調査区の調査成果とほぼ同じ内容を有している。これらの調査成果から、光構内でも峨嵋山から派生する丘陵により近い地点(本調査A調査区・平成2年調査地)と海岸部に近い地点(昭和40年調査地)では遺物包含層の形成に大きな差異が見いだせる。

写真12 A調査区南西部北西壁土層断面(南東から)

写真13 A調査区中央部北西壁土層断面(南東から)

b. 遺構

第1遺構面（図15・写真14～17・表2）

第1遺構面で検出された遺構としては、ピット、土壙、溝、暗渠などがある。これらの遺構は出土遺物から近世 ー 近現代のものと考えられるが、その多くは過去に現光構内に所在していた山口県立工業学校（明治36年設立）、現在の附属光小・中学校の前身である山口県室積師範学校（大正3年設立）などに関連する施設の痕跡と考えられる。各遺構から出土する遺物には近世以前に遡りうるものもあるが、多くは器種および時期の判別不能な小片であり、またそれらの大部分は近現代の遺物と混在して出土する状況である。

各遺構の規模等は下記の表の通りであるが、この中で注目される遺構としては、礎石を有する柱穴（Pit17・18）と溝（SD5・6・10）である。両者はその軸方向を一にしており、同時期に所属する遺構群である可能性が高い。礎石中心間の距離は約190cmである。

平成2年実施の運動場改修に伴う発掘調査では、A調査区第1遺構面と同一面と考えられる第2層上面において、6世紀末～7世紀初頭の遺物を埋土に含む土壙1基を検出しているが、今回の調査では同時期の遺構は検出されなかった。

表2　A調査区第1遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模（cm）	深さ（cm）	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	44×50	11.0			
	Pit2	不明	（42）×不明	7.3			
	Pit3	不明	不明	7.5			
	Pit4	楕円形	30×46	7.2			
	Pit5	不明	不明	11.0			2段Pit
	Pit6	楕円形	12×15	5.5			
	Pit7	円形	径 28	3.0			
	Pit8	不明	（18）×不明	2.7			
	Pit9	隅丸方形	38×42	11.5	陶器・瓦・ガラス	近現代	
	Pit10	楕円形	42×47	8.1	土師器・磁器	江戸後～近代	
	Pit11	楕円形	50×（42）	3.5			
	Pit12	円形	径 20	12.6	瓦	江戸後～近代	
	Pit13	不明	（36）×不明	10.8			
	Pit14	円形	径 33	2.8	磁器・瓦	江戸後～近代	
	Pit15	長方形	40×58	11.8	土師器		2段Pit
	Pit16	不明	不明	4.3			
	Pit17	楕円形	45×51	10.3	瓦	江戸後～近代	礎石
	Pit18	楕円形	43×53	10.3	陶器・瓦	江戸後～近代	礎石
	Pit19	楕円形	22×30	3.6			
	Pit20	楕円形	47×56	9.3	磁器	江戸後～近代	
	Pit21	不明	（36）×不明	9.4			
	Pit22	楕円形	45×76	6.4			
	Pit23	円形	径 17	4.0			
	Pit24	楕円形	21×不明	5.8			
	Pit25	楕円形	13×16	3.6			
	Pit26	楕円形	19×32	6.9			
	Pit27	不明	不明	3.6			
	Pit28	楕円形	17×22	10.0			
	Pit29	不明	不明	2.3			
土壙	SK1	方形か	（134）×（267）	46.3	土師器・陶器・瓦質土器	江戸後～近代	
	SK2	楕円形か	（93）×（27）	7.4			
	SK3	楕円形か	59×（74）	10.0			
	SK4	楕円形	53×76	16.5	土師器・磁器・陶器・瓦	江戸後～近代	南東部に段
	SK5	長方形か	（62）×（170）	94.0	土師器・瓦質土器・磁器・陶器・瓦・土製品	近現代	
	SK6	隅丸長方形	32×105	8.1			
	SK7	楕円形か	67×（48）	16.7			
溝	SD1		90×（830）	21.0	土師器・瓦質土器・磁器・陶器・レンガ	近現代	石敷暗渠
	SD2		31×（51）	9.6			
	SD3		20×（46）	11.7			
	SD4		83×（358）	6.3	土師器	近現代	石敷暗渠
	SD5		48×173	7.0	陶器・瓦	江戸後～近代	
	SD6		44×300	14.3	土師器・瓦質土器・磁器・陶器・瓦・紙石	江戸後～近代	
	SD7		36×（67）	4.5			
	SD8		26×85	5.4			
	SD9		51×205	5.1	土師器	近現代	
	SD10		49×（138）	10.0			

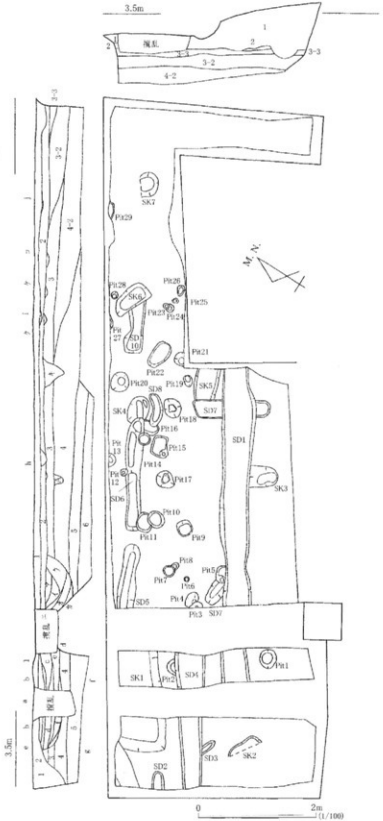


図 15　A調査区第1遺構面平面図・土層断面図

第2遺構面(図16・写真18～21・表3)

第2遺構面では、ピット39基、土壙5基、溝5条が検出された。

これらの遺構の内、ピット群は配置・規模が不揃いであり、掘立柱建物等の復元には至っていない。そもそも本稿では平面形態が小型円形、もしくは円形状を呈する遺構をピットと呼称しているが、柱穴という認識は妥当であろうか。第2遺構面の基盤層である第2層は非常に脆弱な砂質土であり、柱の設置は可能であったとしても上方に重量のある建築物を長期間維持し続けることは困難なものと推測される。ピット内に礎石等の施設も確認されないため、これらのピット群の性格にはさらに検討の余地があろう。

土壙5基は、上層遺構や既設の管路による破壊が激しく、また遺構の一部が調査区外に及ぶことから、全体の形状を把握できるものはない。残存部分から平面形態を推測すると、円形もしくは楕円形状を呈するものが多いようである。断面形態は、すり鉢状に底面を形成するもの(SK2・4・5)と丸底状のもの(SK1・3)とに分類できる。これらの土壙の性格に関しては、出土遺物がきわめて少なく判断材料にかける。ただし、柱穴遺構と同様に基盤層が脆弱であるため、遺構壁面が長期間崩落せずに保っていたとは考えがたい。事実、調査時の遺構掘削においては、遺構周辺を歩くだけで遺構壁面が崩落してしまうほ

表3 A調査区第2遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	不明	不明	不明			
	Pit2	不明	不明	4.6			
	Pit3	円形	径 22	6.3			
	Pit4	円形	径 29	8.9			
	Pit5	円形	径 13	8.5			
	Pit6	不整形	29×59	16.5			
	Pit7	不整形	67×不明	10.5			
	Pit8	円形	径 27	5.0			
	Pit9	円形	径 19	8.5			
	Pit10	楕円形か	18×不明	5.8			
	Pit11	楕円形	38×48	17.3			
	Pit12	楕円形	13×18	6.5			
	Pit13	不整形	47×不明	10.6			
	Pit14	不明	不明	6.9			
	Pit15	不明	不明	17.7			
	Pit16	楕円形	25×28	25.9			
	Pit17	楕円形	21×26	19.4			
	Pit18	円形	径 24	15.0			
	Pit19	円形	径 26	15.5			
	Pit20	隅丸長方形	37×75	10.8			
	Pit21	楕円形	30×58	12.8			
	Pit22	円形	径 22	16.3			
	Pit23	円形か	(径 63)	13.2			
	Pit24	楕円形か	14×不明	6.0			
	Pit25	楕円形	27×44	18.2			
	Pit26	隅丸長方形	40×68	12.2			
	Pit27	不整形	67×69	20.2			2段Pit
	Pit28	楕円形	21×25	10.7			
	Pit29	楕円形	37×44	11.8			
	Pit30	楕円形	33×38	18.8			
	Pit31	不明	不明	57.5			
	Pit32	不明	(44)×不明	17.4			
	Pit33	楕円形か	22×不明	4.1			
	Pit34	楕円形か	47×不明	12.6			
	Pit35	楕円形か	55×不明	43.3	土師器		
	Pit36	楕円形か	31×不明	17.9			
	Pit37	楕円形か	31×不明	7.1			
	Pit38	不明	42×不明	11.3			
	Pit39	不整形	70×不明	11.0			
土壙	SK1	不明	不明	36.0	土師器		底面に小Pit 6カ所検出
	SK2	不明	不明	16.2			
	SK3	円形か	不明	72.4	土師器		
	SK4	円形か	不明	37.0	土師器		
	SK5	隅丸方形か	不明	30.0			
溝	SD1		31×96	20.5			
	SD2		40×151	17.3			「く」の字に屈曲

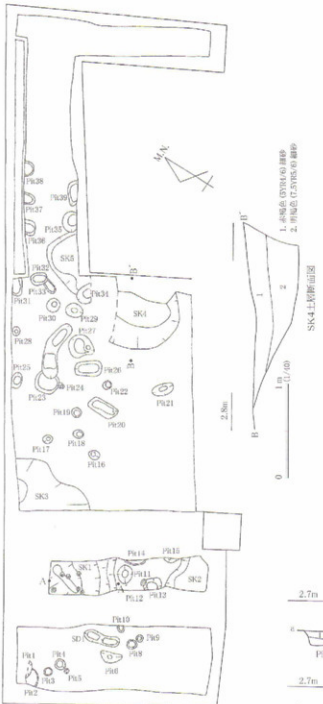


図 16　A調査区第2遺構面平面図・断面図

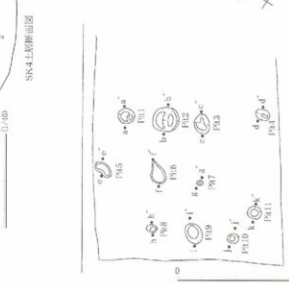


図 18　A調査区第3遺構面遺構断面図

図 17　A調査区第3遺構面平面図

写真 14　A調査区中央部第1遺構面遺構検出状況
（北東から）

写真 15　A調査区南西部第1遺構面完掘状況
（南東上方から）

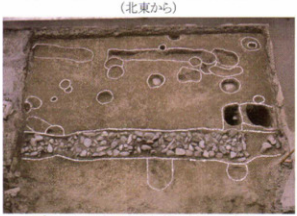


写真 16　A調査区中央部第1遺構面完掘状況
（南東上方から）

写真 17　A調査区中央部第1遺構面完掘状況
（北東から）

写真 18　A調査区南西部第2遺構面完掘状況
（南東上方から）

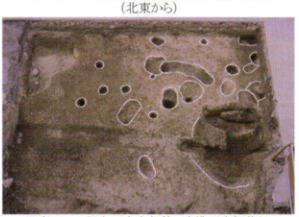


写真 19　A調査区中央部第2遺構面完掘状況
（南東上方から）

写真 20　A調査区第2遺構面SK1土層断面
（北東から）

写真 21　A調査区第2遺構面SK4土層断面
（南東から）

写真 22　A調査区中央部第3遺構面完掘状況
（南東上方から）

写真 29　第3遺構面Pit7半裁状況
（南東から）

写真 30　第3遺構面Pit8半裁状況
（南東から）

写真 23　第3遺構面Pit1半裁状況
（南東から）

写真 26　第3遺構面Pit4半裁状況
（南東から）

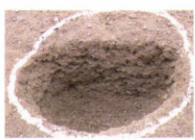


写真 31　第3遺構面Pit9半裁状況
（南東から）

写真 24　第3遺構面Pit2半裁状況
（南東から）

写真 27　第3遺構面Pit5半裁状況
（南東から）

写真 32　第3遺構面Pit10半裁状況
（南東から）

写真 25　第3遺構面Pit3半裁状況
（南東から）

写真 28　第3遺構面Pit6半裁状況
（南東から）

写真 33　第3遺構面Pit11半裁状況
（南東から）

どであった。したがって、これらの土壙は掘削してすぐに埋める、もしくはすぐに埋まることを前提に構築されたものであろう。遺構内埋土は遺構基盤層と同様の砂ないし砂質土、色調もほぼ同一であり、有機物等によって土壌化した形跡はない。

一方、平成2年実施の運動場改修に伴う発掘調査では、A調査区第2遺構面と同一面と考えられる第3層上面において、断面形態台形の土壙4基が確認されている。平面形態は、円形もしくは楕円形と推定できるもの3基、隅丸方形のもの1基である。遺構内埋土からは土師器・須恵器の小片が出土しているが、時期を推定しうる資料ではない。

第3遺構面（図17・18、写真22～33、表4）

調査区中央部において、ピット11基が検出された。ピット群は一見するとPit1～3、Pit5～7、Pit8・9・11の北西－南東方向の列、Pit2・6・8、Pit3・7・9の北東－南西方向の列とが規則的配列を見せているように思えるが、このピット群から建物の平面形態および規模を復元するには至らなかった。また、第2遺構面で検出されたピット群同様、遺構底面に礎石等の設備も有しておらず、やはり長期間使用する建築物の支持を前提とした柱穴としての性格は想定しがたい。

各柱穴の形態を見ると、平面形態としては不整形なものもあるが総じて楕円形状を呈している。一部に段状の施設を有しているもの（Pit1～3）もあるが、意図的なものではなく柱状施設の差し込みまたは抜き取りの際に生じた痕跡である可能性がある。底面の断面形態は、ほぼ平坦なもの（Pit1～3・5～7・10）とU字形を呈するもの（Pit4・8・9・11）とに分類される。

遺構内埋土からはPit3・7から土師器片が出土している。極細片であるため、器種および時期の判別は不可能である。

表4　A調査区第3遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	38×42	24.9			北西部に段状部分
	Pit2	楕円形	61×68	44.8			北西部に段状部分
	Pit3	楕円形	39×52	22.1	土師器		北東部に段状部分
	Pit4	楕円形	29×39	17.5			
	Pit5	不整形	28×49	8.9			
	Pit6	不整形	40×60	5.1			
	Pit7	楕円形	14×17	4.1	土師器		
	Pit8	楕円形	20×28	11.6			
	Pit9	楕円形	44×58	8.5			
	Pit10	楕円形	33×38	18.8			
	Pit11	楕円形	26×31	28.6			

c. 遺物

第1遺構面出土遺物（図19、写真34）

1～3・8は陶器および粗陶器。1は陶器口縁部片であり、口縁は端部を折り曲げ外表面に接合させる。上端部は素地を残す。2は瓦質粗陶器口縁部片。口縁はほぼ直角に外反させる。内面調整は横方向のハケ。1、2共に器種は鉢か。3は土師質粗陶器の擂鉢底部。内底面には7本単位の卸目を左回りに施す。体部内面も卸目を左回りに連続して施す。8は陶器擂鉢口縁部片。口縁を「く」の字に外反させる。卸目は左回りに施す。

5～7は磁器。5は皿底部片。見込みには不明文様と圏線を1条、外面には不明文様と圏線7条、また高台外面にも圏線を1条施す。畳付釉剥ぎ。6は碗底部片。内面に圏線1条、外面は圏線（下半7条、上半現存2条）と丸文を施す。高台外面に圏線1条。畳付釉剥ぎ。7は碗口縁部片。内面口縁部下に圏線2条、外面は圏線2条と格子文を描き、背景に山と思われる文様を描く。6・7は染付に人工コバルトを用い

ている。

9～11は瓦質土器。9は鍋口縁部片。口縁を「く」の字状に外反させる。内面には煮炊きにより有機物が付着している。10は外面に花文スタンプを押捺する。火鉢片か。11は脚部および底部。粗製の短い脚を有する。火鉢片か。

12・13は瓦。12は珠文帯を有する軒丸瓦。13は丸瓦。凹面胴部にタタキによる棒状痕跡が残る。玉縁連結部分付近に釘穴を有する。

14は瓦質焼成された用途不明品。13・14は七厘のサナ。両者ともに中央に1孔、周囲に6孔が復元される。

4は砂岩製の砥石。部分的に破損しているが、ほぼ原形をとどめる。正方形に側縁を加工した板状の石の片面を使用している。反面は自然面を残す。

各遺物の出土遺構は、2がSK1、1がSK4、3・4がSD6、5～16がSK5である。

第2遺構面出土遺物(図20、写真35)

17・18は器種不明土師器。17は端部直下に凸帯を付加する。断面は縦・横共にわずかに円弧を描くがほぼ直線的な形態である。図示した方向で外面調整は縦方向のハケ、内面は横方向のナデ。端部は鈍く面を形成している。18は端部からやや下がった位置に凸帯を付加する。断面形態および調整は17と同様であり、同一個体である可能性が高い。器種としては竈形土器の部分である可能性がある。

出土遺構は、17がPit35、18がSK4である。

第2層出土遺物(図20、写真35)

19～20は土師器。19は器種不明品。端部の形態から基底部と考えられる。復元径25.0cm。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のケズリ。器種としてはやはり竈形土器の基底部片である可能性があるが、内面に煤等の付着は見られない。20は土師器角状把手。把手周囲および内面調整はナデであるが、外面に一部縦方向のハケが残る。

21は須恵器体部片。調整は外面格子タタキ、内面はナデ。器種不明。

22は土師器甕の頸部から体部にかけての破片と思われるものであるが、土師器甕としては器壁が薄く、他の土師器類と比べるとやや硬質の感がある個体である。調整は外面は縦方向の平行タタキ、内面には横方向の緻密なナデが施されている。所属時期は不明と言わざるを得ないが、韓式系の軟質土器である可能性を指摘しておく。

光構内では、過去にも韓式系土器の出土例がある。平成11年に資料館により実施された光小・中学校上水道(給水管)改修に伴う試掘・立会調査では、鳥足文タタキが施された竈形土器が出土している[註3]。また平成3年に実施された光中学校武道館新営に伴う発掘調査では、外面に格子目状のタタキ、内面にハケ調整が施された土器片3点が出土しており、報告者は韓式系土器である可能性を示唆している[註4]。これらの出土例は、当地における古墳時代を特徴づける遺物として注目される。

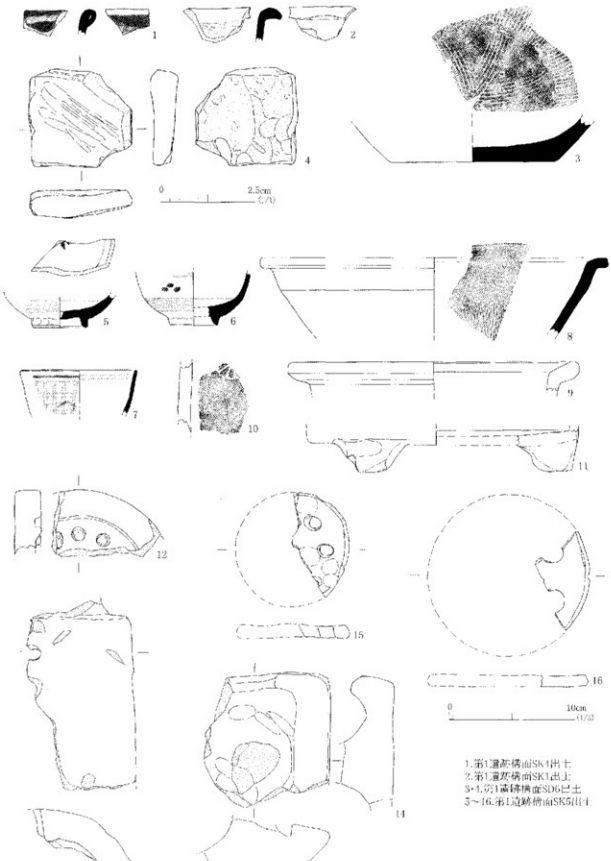


図 19 A調査区第1遺構面出土遺物実測図

写真 34　A調査区第1遺構面出土遺物

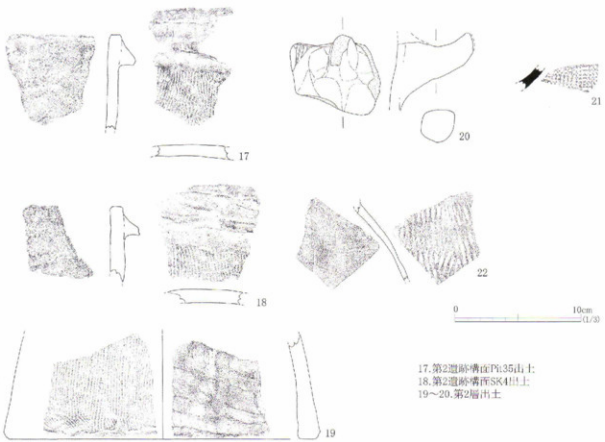


図 20 A 調査区第2遺構面・第2層出土遺物実測図

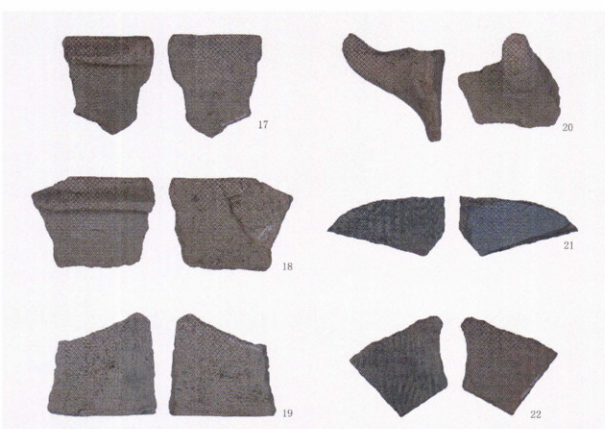


写真 35 A 調査区第2遺構面・第2層出土遺物

表5 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	地区	出土遺構	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	A	第1遺構面 SK4	埋土	陶器 鉢か	口縁部		素地 にぶい黄橙色(10YR6/3) 釉 灰黄色(2.5Y6/2)	精緻	灰釉
2	A	第1遺構面 SK1	埋土 第1層	瓦質粗陶器 鉢か	口縁部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y4/1)	精緻	
3	A	第1遺構面 SD6	埋土	土師質陶器 擂鉢	底部	②(12.8)	①②明赤褐色(2.5YR5/6)	0.5～5mmφの粗砂粒少量混ざる	
4	A	第1遺構面 SK5	埋土	磁器 皿	底部～体部	②(4.0)	素地 灰白色(7.5Y7/1) 釉 灰白色(5Y7/1)	精緻	染付
5	A	第1遺構面 SK5	埋土	磁器 碗	底部～体部	②(3.6)	素地 灰白色(5Y8/1) 釉 透明	精緻	染付 畳付釉剥ぎ
6	A	第1遺構面 SK5	埋土	磁器 碗	口縁部	①(9.0)	素地 灰白色(5Y8/1) 釉 透明	精緻	染付 畳付釉剥ぎ
7	A	第1遺構面 SK5	埋土	陶器 擂鉢	口縁部	①(27.4)	素地 橙色(5Y6/6) 釉 黒褐色(5YR2/1)	精緻	鉄釉
8	A	第1遺構面 SK5	埋土	瓦質土器 鍋	口縁部	①(23.0)	①②黒色(10YR2/1)	0.5～1mmφの粗砂粒少量混ざる	
9	A	第1遺構面 SK5	埋土	瓦質土器 火鉢か	体部		①黄灰色(2.5Y5/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.5～2mmφの金雲母等砂粒少量混ざる	
10	A	第1遺構面 SK5	埋土	瓦質土器 火鉢か	脚部～底部	②(23.0)	①灰色(5Y4/1) ②灰色(5Y5/1)	0.5～3mmφの粗砂粒多く混ざる	
11	A	第1遺構面 SK5	埋土	軒丸瓦			黄灰色(2.5Y6/1)	0.5～1mmφの粗砂粒少量混ざる	径(15.6cm) 珠文
12	A	第1遺構面 SK5	埋土	丸瓦			灰色(N5)	0.5～1mmφの粗砂粒少量混ざる	釘穴
13	A	第1遺構面 SK5	埋土	不明			にぶい黄橙色(10YR6/3)	0.5～3mmφの粗砂粒多く混ざる	瓦質焼成
14	A	第1遺構面 SK5	埋土	土師器 サナ			にぶい褐色(7.5YR5/4)	0.5～2mmφの石英等砂粒少量混ざる	径(9.0cm) 推定孔数7
15	A	第1遺構面 SK5	埋土	土師器 サナ			にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.5～2mmφの粗砂粒少量混ざる	径(12.8cm) 推定孔数7
16	A	第2遺構面 Pit35	埋土	土師器 竈形土器か	端部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②黄橙色(10YR8/6)	0.5～2mmφの粗砂粒少量混ざる	
17	A	第2遺構面 SK4	埋土 第1層	土師器 竈形土器か	端部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②黄橙色(10YR8/6)	0.5～2mmφの粗砂粒少量混ざる	
18	A		第2層	土師器 竈形土器か	基底部か	②(25.0)	①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.5mmの砂粒粒少量混ざる	
19	A		第2層	土師器 角状把手	体部		①②明黄褐色(10YR6/6)	0.5～2mmφの粗砂粒少量混ざる	
20	A		第2層	須恵器	体部		①灰色(N5) ②青灰色(10BG6/1)	0.5mmの粗砂粒少量混ざる	格子タタキ
21	A		第2層	韓式系土器 甕	頸部～体部		①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい橙色(7.5YR5/4)	精緻	
22	B	第2遺構面 Pit1	埋土	須恵器 甕	体部		①②灰色(N6)	0.5～1mmφの粗砂粒少量混ざる	
23	B	第2遺構面 Pit1	埋土	須恵器 甕	体部		①②灰色(N6)	0.5～1mmφの粗砂粒少量混ざる	
24	C	撹乱坑	埋土	縄文土器 鉢か	体部		にぶい黄橙色(10YR6/4)	0.5～2mmφの粗砂粒少量混ざる	磨消縄文

表6 出土遺物(石器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	調査区	出土遺構	層位	器種	法量(cm)	重量(g)	石質	備考
1	A	第1遺構面SD6	埋土	砥石	縦7.8 横8.0 最大厚2.2	175.4	砂岩	
2	C		第1層	石臼	径(30.0) 最大厚14.2	6,500	花崗岩	上臼

(3)B調査区

a. 基本層序(図21、写真36)

B調査区は身障者用便所新設地であり、小学校校舎の建設工事に伴う撹乱が大きいと予測された地点である。調査の結果、校舎基礎および既設の配管等により開発地の大部分が撹乱を受けていたが、南西部において部分的に埋蔵文化財が確認された。

調査区南西壁における基本層序は、

第1層…表土(層厚約50cm)

第2層…褐色(7.5YR4/6)砂質土※1～3cmφの小礫多く含む(層厚約10cm) ー 第1遺構面の検出層

第3層…黄褐色(10YR5/6)砂礫※0.5～4cmφの小礫多量に含む(層厚約10cm) ー 第2遺構面の検出層

第4層…にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂※砂粒0.5cmφと褐色(10YR4/4)細砂※0.5～5cmφの小礫多量に含むの互層(層厚30cm以上)

であり、A調査区と同じ基本層序となっている。遺構および遺物は、第2層上面(第1遺構面)と第3層上面(第2遺構面)で確認された。第4層上面では遺構は検出されなかった。

b. 遺構(図21、写真37)

第1遺構面

平面形態隅丸方形状の土壙1基を確認した。遺構の一部が調査区であったため全体の規模は不明であるが、検出部分での遺構最大幅は88cm、深さ6cmである。埋土内からは土師器の細片1点が出土している。

第2遺構面

ピット4基を検出した。この内1基(Pit1)では、底面に張り付いた状態で須恵器の大甕体部片が出土している。このピットは南西半部が調査対象地外であるため全体の形状は不明であるが、現状では平面形態楕円形、最大幅54cm、全長47cm以上、深さ17cmである。

c. 遺物(図22、写真38)

23・24は須恵器大甕体部片である。接合はしないが同一個体と見なしてよく、調整は23が外面平行タタキ後カキ目、内面に同心円当て具痕が明瞭に残る。24は外面平行タタキ、内面に内面に同心円当て具痕が明瞭に残る。甕腹部下の底部に近い体部片と考えられ、残存部位(23部分)での復元径は80～90cm内外が求められる大型品である。

写真 36 B調査区南西壁土層断面 (北東から)

写真 37 B調査区第2遺構面遺構完掘状況 (北から)

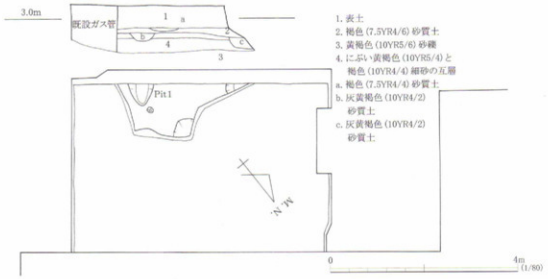


図 21　B調査区断面図・第2遺構面平面図

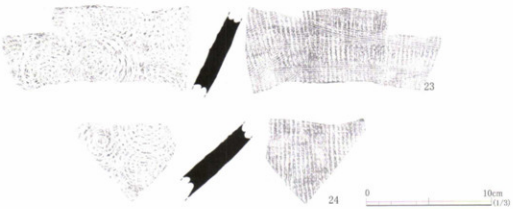


図 22　B調査区第2遺構面出土遺物実測図

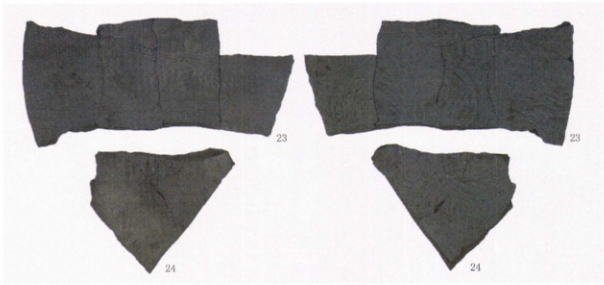


写真 38　B調査区出土遺物

(4)C調査区

a. 基本層序(写真41)

C調査区は小学校校舎玄関スロープ新設地であり、建設工事に伴う掘削深度が浅いために埋蔵文化財の保護上影響は少ないと予測された地点である。しかしながら、先行して実施したA・B調査区の調査結果から、小学校校舎北東部周辺では現地表直下に遺構・遺物が埋存していることを確認した。したがって、教育学部附属光小・中学校および開発施工業者の協力の下、C調査区の立会調査も慎重に実施することとなった。

調査の結果、校舎建物回りを中心として調査区の大部分は基礎や既設の管路によって撹乱を受けていたが、調査区北部、校舎玄関前地点で遺構面が残存していることを確認した。遺構残存地点での基本層序は、

第1層…表土(層厚約20cm)

第2層…褐色(7.5YR4/6)砂質土※1～3cmφの小礫多く含む ー 遺構面の検出層

である。第2層は開発工事の掘削深度により上面を検出するに留まったが、遺構面の基盤となる層の土質は、A・B調査区の第2層(第1遺構面検出層)と同質のものである。

b. 遺構(写真40)

ピット13基を検出した。各遺構の規模および出土遺物は下表の通りである。

表7 C調査区遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	時期	備考
ピット	Pit1	楕円形	16×22	5.8			
	Pit2	楕円形	19×25	5.5			
	Pit3	円形	径 14	5.7			
	Pit4	不明	(38)×不明	9.6			
	Pit5	楕円形か	(36)×不明	4.9			
	Pit6	楕円形	37×40	14.8	土師器		
	Pit7	楕円形か	31×不明	9.6			
	Pit8	楕円形	20×27	8.8			
	Pit9	隅丸方形	30×30	11.5			
	Pit10	楕円形か	41×不明	8.4			
	Pit11	楕円形か	36×不明	5.6	土師器		
	Pit12	楕円形	21×25	6.1			
	Pit13	楕円形	36×59	7.7			

c. 遺物(図25、写真39)

C調査区の遺構内からは土師器の細片が出土しているが、器種および時期の判別は不可能である。遺構面を覆う第1層からは、土師器細片、瓦片と共に石臼が出土している。

25は花崗岩製の石臼の上臼片である。風化が激しく表面の剥離が見られるが、主溝・副溝は残存しており、現状で主溝1条、副溝5条が確認できる。その配置から、主溝により8分割した区画内を副溝3条で充填する型式に復元できる。上臼の回転方向は左回り。また上下面に貫通する供給口と、側面には方形の挽き手孔が残存している。上臼復元径は約30cmである。

この他に、遺構面残存部南東側にある既設管路の埋め戻し土中から縄文土器片1点が出土している。

26は摩耗が激しいが磨消縄文土器の破片であり、現状で2条の沈線を有する個体である。鉢口縁部付近の破片と考えられる。岩田第Ⅰ類bに該当するが、[註9]縄文時代後期前葉に属するものであろう。

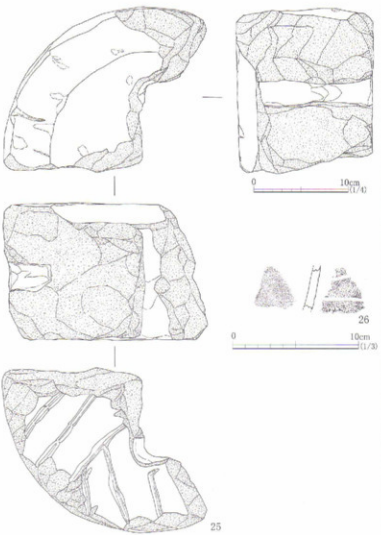


図 23　C調査区出土遺物実測図

写真 39　C 調査区出土遺物

写真 40　C 調査区遺構完掘状況
（北西から）

写真 41　C 調査区土層断面（南から）

(5)小結

今回の光構内の調査は、小学校校舎建物回りを対象地として実施された。調査の結果、A～C調査区で第2層上面を検出面とする第1遺構面、A・B調査区で第3層上面を検出面とする第2遺構面、A調査区で第4層上面を検出面とする第3遺構面が確認された。

この内第1遺構面は江戸時代後半を上限とする遺構群であるが、多くは現在の光小・中学校の前身施設に関連する施設の痕跡と考えられる。

第2遺構面は、遺構から出土した遺物では時期の特定には至らないが、資料館によって実施された過去の調査で確認されている古墳時代後期の遺構面と対応する可能性が極めて高い。この古墳時代後期の遺構面は、これまでに小学校運動場の南西側調査地点、中学校武道館調査地点で確認されており、いずれも丘陵部に近接する地点である。今回の調査ではA・B調査区で第2遺構面を検出しているが、A調査区の北東部では遺構面の基盤層である第2層が海岸部の浸食作用により消滅していることが確認されている。したがって、現状では小学校校舎付近が古墳時代後期の遺構面が埋存する北東限域である可能性を有している。

第3遺構面はA調査区でのみ確認されている。検出された遺構はピット群であり、現状では建物等の復元は困難である。また、遺構内からは土師器細片しか出土しておらず、時期を推定するには至っていない。少なくとも、古墳時代前期以降、古墳時代後半（第2遺構面）以前にこの地において人類の何らかの活動があったと記するに留めたい。

なお、第2・3遺構面で検出された遺構は、いずれも脆弱な基盤層を掘り込んで築かれたものであり、遺構上部に何らかの構造物が存在していたとしても長期間におよぶ使用は困難であったものと考えられる。過去の調査においても指摘されていることであるが、本地は農耕等の耕作には不向きな立地であり、集落が形成されていたとしても不安定な生産基盤・生業形態に支えられたものであったと推定される。また、過去の調査における丹塗り土器の出土[註6]や竈型土器の顕著な存在[註7]は、そのような状況下での活発な祭祀行為を示唆するものではなかろうか。

以上が平成15年度に実施した調査成果の概略報告である。光構内（御手洗・月待山遺跡）の性格には未だ不明確な部分が多く、全貌の解明にはさらなる調査・研究が必要であろう。光構内における諸施設は老朽化が進んでおり、今後も設備の改修等に伴う掘削工事が計画される可能性が非常に高い。埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要であることは言を俟たない。

［註］

1）河村吉行（1992）「第3章　光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』，山口

2）福本幸夫（1966）「Ⅱ光市における先原始時代の遺跡」，福本幸夫（編）『先原始時代の光市』，光（山口）

3）田畑直彦（2004）「第8章　平成7・10～14年度山口大学構内遺跡調査の概要」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』，山口

4）豆谷和之・田崎美佐（1994）「第3章　光構内教育学部附属中学校武道館新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』，山口

5）潮見浩（1960）「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」，広島大学文学部（編）『広島大学文学部紀要18』，広島

6）前掲註1

7）前掲註3

第7節　その他構内の調査

ボート部合宿所給排水整備工事に伴う立会調査

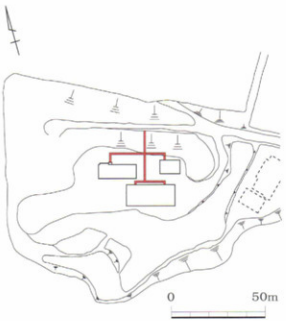


図24　調査区位置図

調査地区　宇部市大字小野字土井
調査面積　約80㎡
調査期間　平成16年 2月16・18日
調査担当　田畑直彦
調査結果　ボート部合宿所は小野湖東岸に位置する丘陵上に立地している。工事は給水管、排水管の取り替えに伴うもので、幅約1m、総延長約80mの範囲を現地表下約70㎝まで掘削するものである。調査の結果、合宿所北側の斜面では造成土の範囲内であった。そのほかは現地表下約15～25㎝が表土で、以下は黄褐色粘質土の地山であった。

ボート部合宿所では、昭和59年に生活排水浄化槽新設に伴い、合宿所の北側で立会調査が行われている[1]。その結果、表土以下では地山が確認され、埋蔵文化財は消失している可能性が指摘されている。今回の調査はボート部合宿所における2回目の調査となったが、結果は前回の調査結果を追認するもので、調査地全域で大規模な削平が認められた。現状で合宿所と西側に隣接する丘陵とは約60～80㎝の段差があることから、合宿所建設時の造成により、大規模な削平が行われたことが推測される。従って、ボート部合宿所敷地では、過去に埋蔵文化財が存在していたとしてもすでに消失している可能性が高いと考えられる。

写真42　ボート部合宿所全景（南から）

［注］

1）森田孝一（1985）「第9章第4節1．ボート部艇庫合宿研修所整備に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』，山口

付節1　平成15年度　山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第1条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第2条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行う。

（1）　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

（2）　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

（3）　その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第3条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第4条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2　館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第5条　資料館には調査員若干名を置く。

2　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第6条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第7条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第1条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館資料館規則（昭和53年規則第39号。以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

（審議事項）

第2条　委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関し、次の各号に掲げる事項について審議する。

（1）管理及び運営に関する事項
（2）設備充実に関する事項
（3）資料館館長の人事に関する事項
（4）運営に要する経費に関する事項
（5）その他資料館の管理及び運営に関し、必要な事項

（組織）

第3条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
（1）　資料館館長
（2）　各学部から選出された教官各1名
（3）　事務局長

（任期）

第4条　前条第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第5条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。
2　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

（議事）

第6条　運営委員会は、委員の過半数により成立する。
2　議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数の時は、議長の決するところによる。
3　第3条第3号の委員は、第2条第3号に掲げる事項の決議には加わらないものとする。

（幹事）

第7条　委員会に幹事を置き、総務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第7条　運営委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第8条　運営委員会の事務は、総務部研究協力課において処理する。

（雑則）

第10条　この規則に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し必要な事項は、運営委員会が定める。

平成15年度　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会

委員長　宇都宮　宏（農学部講師）
館長　西山　壮一（農学部教授）～平成15年7月15日退任
　　中村　友博（人文学部教授）～平成15年7月16日着任
委員　村田　裕一（人文学部講師）　中田　充（教育学部講師）　木部　和昭（経済学部助教授）
　　長谷部　勝彦（理学部教授）　福本　哲夫（医学部教授）　中園　眞人（工学部教授）
　　櫻井　清（事務局長）

付節2　山口大学構内の主な調査

表8　山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L～N−15	1	30？	土壙・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当小野忠熙	年報Ⅺ
	第Ⅱ地区医学部病院新営	R−20・21 S・T−19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	
	第Ⅱ地区		3			弥生土器、土師器	試掘	〃	
	第Ⅳ地区牛舎新営	S・T−16・11	4	300	弥生溝・土壙、古墳堅穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区		5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区および陸上競技場	D−19・20 E−17・19～21 F−17・18	6	1,600	杭列、弥生竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃	①
	第Ⅲ地区南区	G−21～23 H−22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	H−20 I−19～21 J−20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	G−23 H−23・24 I・J−24 K−23・24 L−23	9		弥生竪穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	J−20 N−14 P−18	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第Ⅴ地区		12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当山口大学吉田遺跡調査団	
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L−14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	L−13	14		古墳大溝	弥生土器、木製品	〃	〃	年報Ⅻ
	第Ⅰ地区D区第2地点	L−13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鏃	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	M−13・14	16		土壙、柱穴	弥生土器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N−14	17		土壙、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L−12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M−13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	M・N−13	20			須恵器	〃	〃	
	第Ⅰ地区E区第2学生食堂新営	M・N−14・15 O−15	21	900	古墳堅穴住居、土壙墓、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	年報ⅩⅡ
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	①
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃	〃	
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N−21	22	160			〃	調査担当吉備一	年報Ⅹ
昭和54年	教育学部附属養護学校新営	A−20・21 B−19・20 C−19	23	410	溝、土壙	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵文化財資料館山口市教育委員会	年報Ⅸ
	理学部校舎新営	N・O−19・20	24	250			〃		年報Ⅹ
	農学部動物舎新営	P−19	25	380			〃		
	本部管理棟新営	L−14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報Ⅷ
昭和55年	経済学部校舎新営	K−21	27	66			試掘		年報Ⅹ
	農学部農業機械実験施設新営	P・Q−15	28	50	溝、土壙		事前		
	本部環境整備	E−14～16 F−15・16	29				立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10・11 P-9・10	30				〃		年報X
昭和56年	教育学部校舎新営	H-19	31		弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報I
	教育学部音楽棟新営	H-16	32		溝		〃		
	教育学部実習科・技術科実験実習棟新営	J・K-19・20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土製器	〃		
	正門橋脚新営	I-11	34				立会		
	時計塔理設	I-14	35				〃		
	本部構内擁壁取設	K-L-13・14	36				〃		
	教養部構内擁壁取設	I-15～17 J-17	37				〃	工法等変更	
	構内道路道路舗装	J～M-15 M・N-16	38				〃		
	農学部中庭整備	N・O-17	39				〃		
	船舶施設改修	O-16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	M-8・9	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N-8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	L・M-16	43	600	弥生～古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報II
	大学会館新営	M・N-14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	A・B-21	45	880			立会		
	放射性同位元素総合実験室排水槽新営	O 18	46	2			〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	L-17	47	10			〃		
	教養部中庭環境整備	J・K-16	48	150			〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N-12・13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報III
	ラグビー場防球ネット新営	G 18・19 H-19・20	50	114	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M・N-20	51	409			立会		
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	I・J-12・13 H-23	52	183			〃		
	学生部アーチェリー場的台・堤柱設置	N-8・9	53	33			〃		
	学生部倉庫整備	M-7・8	54	1.6			〃		
	学生部野球場散水栓取設	I-21 K-22	55	1			立会		
	教養部環境整備	I-15・16 J 15 K-17・18 L 18	56	81			〃		
	学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E 15・16 F-16	57	12			〃		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N～12	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		年報IV
	大学会館排水管布設	J～L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16・17 D 16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L-14・15 M・N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、楽壁	試掘		年報V
	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料圃排水溝修復整備	R-17～19	64	39	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、輸口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V-15～17	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	I-J-19	66	430			〃		
	中央ボイラー煙突止設置	O-P-16	67	2.5		須恵器	〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鏃、砥石、鉄滓	〃		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験動物運動場設置)	Q-18	70	16			〃		
	理学部環境整備(藤棚設置)	N-21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T-19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	M-22・23 N-22	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕のある剥片	試掘		年報VI
	山口銀行現金自動支払機設営(電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T・U-19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	〃	工法変更	
	農学部附属農場農道交通規制(施錠ポール設置)	M-10 P-15 Q-13～17	76	12			〃		
	正門横(水田内)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備(樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			〃		
昭和61年	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市道神郷1号線および間田神郷線の送水管埋設	B-17・18 C-18・19 D-19・20 E-20・21 F-21・22 G-22・23 H-23・24 I・J・K-24 L-23・24 M・N-23 O-22・23 P・Q-22 R-21・22 S-21 T-20・21 U-19・20 V-18・19 W・X-18	80	2,100	古墳・弥生溝、古代河川跡、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器(墨書のあるもの含む)瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	立会	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設(屋根設置および観覧席移動)	K・L-18	81	3.5			〃		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L-15・16	81	3			〃		
	経済学部散水線取設	L-20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E-15 F-15・16 H-15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管埋設	S-12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部身体障害者用スロープ取設	L-14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K-18～20 L-18	88	78			〃	工法等変更	
	附属図書館書物運搬用スロープ取設	L-16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部3号教室改修	K-16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	J・K-18・19	91	240		ブランク、刑器、植物遺体	事前		年報VII
	教養部複合棟新営	J・K-17	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新営	I・J-16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J・K−17・18	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、堀甕土壙、掘立柱建物跡、谷状溝構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鏃、石斧、木製品	事前		年報Ⅷ
	九田川局部改修	B−16・17 C−16	95	20			立会	山口県教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	国際交流会館新営	M・N−22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	B−20	97	1			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及び E6圃場進入路拡幅	L〜N−12	98	55	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N−17	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	J−20	100	0.5			〃		
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	I−16	101	1	包含層か		立会		年報Ⅷ
	国際交流会館新営に伴う排水管埋設	N・O−22	102	35	河川跡(溝か)、包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	J−18	103	1			〃		
	サッカー・ラグビー場改修	F−19・21 G−18	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K〜M−22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新営	J・L−15	106	4	古墳溝状遺構柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、六連式製塩土器	事前		年報Ⅸ
	塩野寮ボイラー設備改修	O−20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H−22 I−21・22 J・K−21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	〃		
	防火水槽配管布設	K・−21・22	109	15	柱穴		〃		
	吉田寮ボイラー設備改修	M−8	110	4			〃		
	体育施設系給水管改修	G・H−16	111	50		陶器	〃	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M−13	112	6			〃		
	吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修	M−8	113	45	包含層	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、剥片、二次加工のある剥片	〃		
	第2武道場排水溝新営	G−15	114	2	溝		〃		
	案内標識設置	I−14 L−18	115	0.5			〃		
	本部車庫給水管改修	L−13	116	6.5		弥生土器	〃		
	大学会館前庭環境整備	N−14・15	117	35	中世溝		〃		
平成2年	大学会館前庭環境整備	M−15	118	2			〃		年報X
	第1学生食堂設備改修	I・J−19	119	7			〃		
	教育学部附属養護学校案内板設置	E−20	120	1			〃		
平成3年	農学部連合獣医学科棟新営	O・P−17	121	76	縄文河川	縄文土器、石器	試掘		年報XⅠ
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P−17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室その他機器替機械設備改修	P−17	123	8			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L・M−15	124	2			〃		
	サークル棟新営	F−14	125	1			〃		
平成4年	農学部連合獣医学科棟新営	O・P−17	126	980	縄文河川	縄文土器、石器	事前		年報XⅡ
	交通規制標識及びバリカー設置	H−22 M−10 O−22 R−19 S−20	127				立会		
	吉田構内道路(南門ロータリー)取設	H−23	128	40			〃		
	ボイラー室給水管漏水補修	O−16	129	4			〃		
	農学部附属農場ガラス室新営	S−14	130	3.5			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L・M−15	131	3			〃		
	泉町平川線緊急地方道路整備工事及び山口大学吉田団地環境整備(正門周辺)	E−11・12	132				〃		
	泉町平川線緊急地方道路整備(信号機設置)	I−11	133	7			〃		
平成5年	本部裏給水管埋設	K〜M−13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、滑石製模造品	事前		年報XⅢ
	人文学部・理学部講義棟新営	M−20	135	4			試掘		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	第2屋内運動場新営	G・H-16	136	144	溝	弥生土器、須恵器、砥石	〃		年報XIII
	農学部給水管埋設	N～P-18	137	9			〃		
	基幹整備(屋外総給水管改修)	L-15 M-17・18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学科棟新営 電気設備	O-16	139	4			〃		
	大学会館前庭バリカー設置	N-14	140	1			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6			〃		
	九田川河川局部改良	C-16 D-15・16	142	40			〃		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			〃		
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10			〃		
	教育学部給水管埋設	H・J-19	145	15			〃		
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13～15 N-14・15	146	140.9			〃		
	環境整備(遺跡保存地区)	H-20 I-19～21 J-20・21	147	361			〃		
	環境整備(正門周辺)	G-13 H-12	148	350			〃		
平成6年	グランド屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18・22 H-19・20 I-21	149	600	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生～古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	事前	工法等変更	年報XIV
	第2屋内運動場新営	G・I-15・16	150	726	弥生～古代溝、貯蔵穴、土坑、近世溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砥石、磨石、敲石、剥片、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、下駄	〃		
	グランド屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20・21 H-19・20	151	200	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生～古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館新営	K・L-21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験廃液処理施設棟新営	H-12・13	153	2	河川		〃		
	体育器具庫及び便所新営	G・H-17	154	60	河川		〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館 仮設電柱設置	L-22 M-22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22・23	156	6			〃		
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F-19	157	2			〃		
	テニスコート改修	B-17 C-16・18 D-15～17 E-15・16	158	15			〃		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設棟新営	B-20～22 C-20	159	16			〃		
	陸上競技場整備(透水管埋設)	C-18 D-18・19	160	200			〃		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30			〃		
	野球場フェンス改修	H-22 I-21・22	162	3			立会		
	基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川か		〃		
	九田川河川局部改良	D-15 E-14・15	164	100			〃		
	第2屋内運動場電柱仮設	G-14・15	165	0.5			〃		
	教養部水道管破裂修理	I-16	166	2			〃		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20～21 G-18・19・22 H-19・20 I-20・21	167	150			〃		年報XIV
	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水施設設置)	A-21	168	4			〃		
	サークル棟給水管埋設	F-14	169	1			〃		
	プール新営給水管埋設	E-15 F-15・16	170	10			〃		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C-18	171	6	河川	土師器	〃		
	教育学部スロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10			〃		

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成7年	農学部和実験研究施設新営	Q・R-17	173	75	近世溝	磁器	試掘		
	農学部和実験研究施設新営	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C・D-18 D・E-17 E・F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新営	T-10	177	22			試掘		
	独身宿舎改修	N・O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N・O-15	179	48	柱穴、包含層	石鏃	試掘		
	第2屋内運動場外周照明施設新設	G-15・16	180				立会		
	機器分析センター新営工事用電柱仮設	O-19～21 P-22	181				〃		
	農学部附属家畜病院バリカー新設	S-20	182				〃		
	吉田寮可燃ゴミ置場新設	N-10	183				〃		
	農学部和実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q・R-17	184				〃		
	情報処理センタースロープ新設	O-19	185				〃		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	E-19・20 F-18・19 G-18	186				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-15・16 J-20 K-19 M-10・11 N-12 O-16～18・20 P-18・19 Q-17・18	187				〃		
平成8年	基幹環境整備(独身宿舎・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H・I-21・22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附属農場排水管布設	S-10・11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
	陸上競技場鉄棒取設	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水溝改修	R-11	192	2.2			〃		
	桃野寮バリカー新設	O-20・21	193	7			〃		
	サッカー場給水管取替	H-19・20 I-19	194	12	包含層		〃		
	基幹環境整備(共通教育センタースロープ・テラス新設)	J・K-17	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	〃		年報XVI
	九田川河川局部改良	E-14	196	18			〃		
	農学部附属農場道路舗装	K-12・13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	〃		
	本部裏排水管取替	K-14	198	2			〃		
	農学部附属農場家畜病院患蓄舎圏障取設	S・T-19	199	1			〃		
平成9年	農学部附属農場地肥舎新営	S-10	200	41.5			試掘		
	農学部バイオ環境制御施設新営	Q-15・16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塩土器、石鏃	試掘		
	カーブミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K-21 K・L-22 L-23	203	23.5	包含層		〃		年報XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			〃		
	九田川河川局部改良	E-14	205	48			〃		
	本部2号館西側バリカー新設	L-13	206	0.5			〃		
	教育学部附属養護学校時計塔新設	D-21	207	1.4	包含層	土師器	〃		
	基幹環境整備(教育学部附属養護学校排水管取替)	C・D-21	208	17	河川		〃		
	基幹環境整備(焼却場裏表上すきとり)	O-16	209	40			〃		
平成10年	第2学生食堂増築及び改修	N・O-15	210	730	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石鏃、鉄製品	事前		
	教育学部附属養護学校給食室改修	C-21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	九田川河川局部改良	E・F-14 F-13	212				立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(バリカー新設)	H-15 I-J-20 O-16・18	213				〃		
	農学部動物用底掃除改修	Q-18	214				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17～19 M・N-18	215				〃		
	理学部スロープ新設	M-18	216				〃		
	ステンレス団転モニュメント新設	M-13	217				〃		
平成11年	第2学生食堂増築その他に伴う屋外電力線路施設整備	O-14～16	218		包含層、柱穴、河川	土師器、須恵器	〃		
	九田川河川局部改良	F・G-13 G・H-12	219				〃		
	第2学生食堂北西擁壁新設	N-14	220				〃		
	サッカー場南側防球ネット新設	G・H-22	221				〃		
	第1体育館・共通教育本館スロープ新設	H-15 K-16	222				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-12 K・L-18 L-15 M・N-17	223				〃		
平成12年	総合研究棟新営	Q-18 R-17～19	224	350	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新営	Q・R-18・19	225	830	河川、土坑	縄文土器、土師器、須恵器、製塩土器、瓦質土器、石鏃	事前		
	鹿舎及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
	架空電線取り外し埋設	O-15 P-15・16 Q-14・15・18・19 R-13・14 K・S-19 S-14	227		包含層		〃		
	九田川河川局部改良	H-11・12 I-10・11 J-9・10 K・L-9	228				〃		
	山口合同ガスガバナー室新設及びガス配管布設	O・P-22	229				〃		
	基幹環境整備(バリカー新設)	N-22 M-10 V-17	230				〃		
	あずま や新設	L-18	231				〃		
	共通教育センター空調設備新設	J-16	232				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K-21 M-10	233				〃		
平成13年	経済学部校舎改修(プレハブ校舎新営)	K-21	234	40	河川	縄文土器	試掘		
	九田川(河川局部改良(平成12年度工事残部分)	L-8・9	235		河川		立会		
	総合研究棟新営埋外配管布設	Q-18	236				〃		
	理学部改修1期工事屋外配管布設	M-18・19 M・N-20 N-19	237				〃		
	九田川河川局部改良	L-8・9	238				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-14・15 J-15 K・L・M-15 N-16 Q～T・V-17	239		河川		〃		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室配管ん設	M-19	240				〃		
	理学部校舎改修2期工事自転車置場新設	N-20	241				〃		
	第1学生食堂トイレ改修	I-J-19	242				〃		
	経済学部校舎改修(プレハブ校舎新営配管布設)	L-21	243				〃		
平成14年	農学部校舎改修(解剖実習棟プレハブ校舎新営)	R・S-19	244	800	掘立柱建物、柱穴、土坑、包含層、河川	土師器、須恵器(墨書土器)、製塩土器、緑釉陶器、瓦、鞴口、鉄滓、銅鏡石	事前		
	農学部附属農場実験圃場整地	O-14	245				立会		
	農学部校舎施設改修	N～Q-17・18	246		河川	縄文土器	〃		
	理学部改修3期工事(案内掲示板・自転車置場新設)	V-O-19 M-19・20	247				〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科プレハブ校舎新営	N-21	248				〃		
	農学部校舎改修(解剖実習棟プレハブ校舎新営)	R・S-19	249		河川、包含層		〃		
	教育学部トイレ改修	I-18	250				〃		
平成15年	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O・P-16 Q-15	251	12	河川		立会		
	教育学部附属養護学校給食調理員専用トイレ新設	C-21	252	1.7			〃		
	農学部環境器測実験棟南側温室	P・Q-15	253	52			〃		
	理学部中庭通路屋根新設	N-19	254	5.8			〃		年報1
	理学部中庭あずまや新設	N-20	255	6.8			〃		
	基幹環境整備(外灯)	F-16、H-14 G-13～15・18 I-16・19 J-19、L-12 Q-15	256	11.5	河川		〃		

白石構内

調査年度	調査名	構内地区名	地点	調査面積(㎡)	遺構	遺物	調査形態	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報Ⅴ
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木植樹)		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土壙か	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、	試掘		年報Ⅵ
	汚水排水管布設	中学校部分		20	河川跡か/杭列	陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体			
	教育学部附属山口小学校電柱移設		6				立会		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剥片	〃		年報Ⅶ
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黒色土器、播鉢、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、石核、砥石	事前		年報Ⅸ
	教育学部附属幼稚園バレーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設		11	170	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、剥器、剥片、石核	〃		
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12	70	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石鏃、敲石、扁平打製石斧、砥石、剥片	事前		年報X
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、扁平打製石斧、砥石	立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校プール新設給水管埋設		14	3			〃		年報XIV
	教育学部附属山口中学校プール新設給水管埋設		15	7			〃		年報XIV
平成7年	教育学部附属山口中学校自転車置場新設		16				〃		
平成10年	教育学部附属山口小学校給食室改修		17				試掘		
平成12年	教育学部附属山口中学校防球ネット新設		18				立会		
平成14年	教育学部附属山口中学校給水設備改修		19		河川、柱穴	土師器	〃		
	教育学部附属幼稚園運動場整備		20				〃		
平成15年	教育学部附属山口幼稚園庇新設		21	27.7			立会		年報1
	山口小学校スロープ新設								

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備(特高受変電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床講義棟病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部附属病院外来診療棟新営		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃		年報Ⅴ
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備(産木移植)		12	40			〃		
昭和61年	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		年報Ⅵ
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等(雨水桝埋設)		14	18			〃		
	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報Ⅶ
昭和62年	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、敲石、礫、原石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報Ⅷ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報Ⅸ
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報Ⅹ Ⅰ
平成4年	焼却棟地盤調査		22				〃		年報Ⅹ Ⅱ
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他		23	9			〃		年報Ⅹ Ⅲ
	医学部附属病院基幹設備(焼却棟新営)		24	6			〃		
平成6年	医学部附属病院MRI-CT装置棟新営		25	300			〃		年報Ⅹ Ⅳ
平成7年	医学部附属病院看護婦宿舎新営		26	40			試掘		
平成8年	医療技術短期大学部屋外排水管布設		27	6			立会		年報Ⅹ Ⅵ
平成9年	医学部慰霊碑・納骨堂新営		28	15.2			試掘		年報Ⅹ Ⅶ
	基幹環境整備(看護婦宿舎浄化槽撤去)		29	4			立会		
	医学部剖棟棟移設		30	10			〃		
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		31	134	包含層、近世～近代用水路	剥片、弥生土器、土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と共同調査	
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線・医学部敷地西側特殊道路)		32	379	包含層、近世～近代溝	剥片、灘文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器	〃	宇部市教育委員会と共同調査	
平成11年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、土坑	陶器、磁器、鉄製品	〃	宇部市教育委員会と共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	灘文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院変エネルギー棟新営		35	13.25			〃		
	総合研究棟新営		36	382	包含層	灘文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器	〃		
平成15年	基幹環境整備(煙突)新営		37	76			試掘		年報Ⅰ

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			〃		年報Ⅴ
	工学部受水槽改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		年報Ⅵ
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報Ⅷ
平成元年	工学部夜間照明装置及び防球ネット設置		7	2			〃		年報Ⅸ
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			〃		年報Ⅹ
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			〃		年報ⅩⅠ
平成4年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		11	6			試掘		年報ⅩⅡ
	工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営		12	40			〃		
	工学部および工業短期大学部職員宿舎取壊		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			〃		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		15	12			試掘		年報ⅩⅢ
	工学部地域共同研究開発センター新営		16	16			〃		
平成7年	工学部国際交流会館新営		17	8		石鏃	〃		
平成8年	工学部国際交流会館新営		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、剥片	事前		年報ⅩⅥ
平成12年	工学部福利厚生棟新営		19	38.5			試掘		
平成13年	工学部インキュベーションセンター新営		20	60			〃		
平成14年	総合研究棟新営		21	13.5			〃		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報1

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 塀掘り新設		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	〃		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	9		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	〃	御手洗湾採集	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	〃		年報Ⅷ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土錘	〃	御手洗湾採集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、 土錘、剥片、敲石	試掘	御手洗湾採集 遺物含む	年報Ⅹ
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土壙	土師器、須恵器、 須恵器壺蓋土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新営		10	38	土壙、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報Ⅺ I
	教育学部附属光小学校 屋外施設整備		11	18		土師器、石鍾	立会		
	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	〃		年報Ⅺ I
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新営		13	500	土壙、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報Ⅺ II
	教育学部附属光中学校 武道館埋蔵調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光小学校 武道館新営その他		15	6			〃		年報Ⅺ III
平成6年	教育医学部附属光小・中学校 プール新営給排水管埋設		16	19			〃		年報Ⅺ IV
平成8年	教育学部附属光小・中学校 囲塀(外周フェンス・防球ネット)取設		17	7		陶磁器	〃		年報Ⅺ VI
平成10年	教育学部附属光小学校 給食棟改修		18	6			〃		
平成11年	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壙	土師器、須恵器、 磁気系土器、 電形土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21				〃		
平成15年	教育学部附属光小学校エレベータ 昇降機等新設		22	169	ピット、土壙、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報1

その他構内

調査年度	調査名	構内地区割	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫 合宿研修所整備	宇部市大字小野字上井	0.5			立会		年報Ⅳ
	学生部ヨット艇庫 合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町 東字中道				〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町3-21	7			〃		年報Ⅴ
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	35	柱		〃		
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市旭通り2丁目3-32	1		土師質土器	〃	6号宿舎	年報Ⅵ
		山口市 水の上町6-9	7		瓦	〃	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石2丁目8-7	1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報Ⅶ
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町6-1	1			〃	1号宿舎	年報Ⅸ
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石観音町1-25	1.2		陶磁器	〃	7号宿舎	年報Ⅹ
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町3-1	0.5			〃	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水 その他改修	山口市湯田温泉6丁目	30			〃		
	経済学部6号職員宿舎 電話設置	山口市旭通り2丁目3-32	0.5			〃		年報ⅩⅠ
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花932-2	1			〃		
平成4年	上竪小路共同下水管布設	山口市上竪小路字久保7-4	7			〃		年報ⅩⅡ
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続及び排水施設改修	山口市湯田温泉6丁目8-29	44			〃		年報ⅩⅣ
平成15年	ボート部合宿所給排水整備	宇部市大字小野字上井	80			立会		年報1

※文献① 山口大学吉田遺跡調査団「吉田遺跡発掘調査概報2」(山口大学、1976年)
※昭和41年以降、吉田構内においては、二事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけでなく注意が必要である。

図 25　山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図

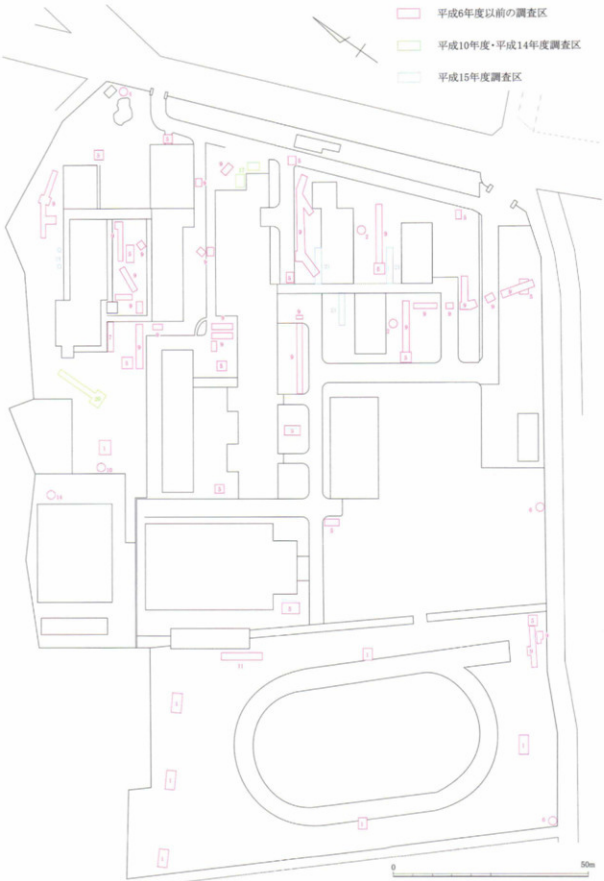


図 26　山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

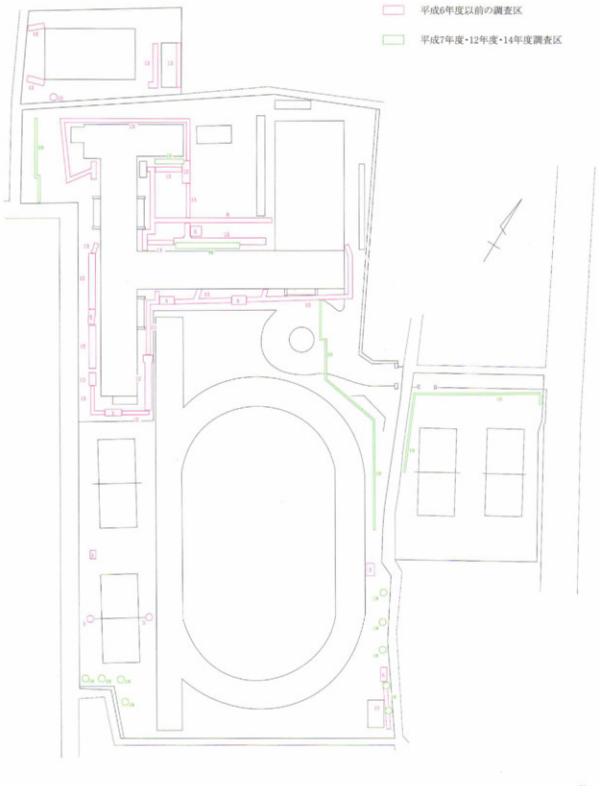


図 27　山口大学白石構内（中学校）調査区位置図

図 28　山口大学小串構内調査区位置図

図 29　山口大学常盤構内調査区位置図

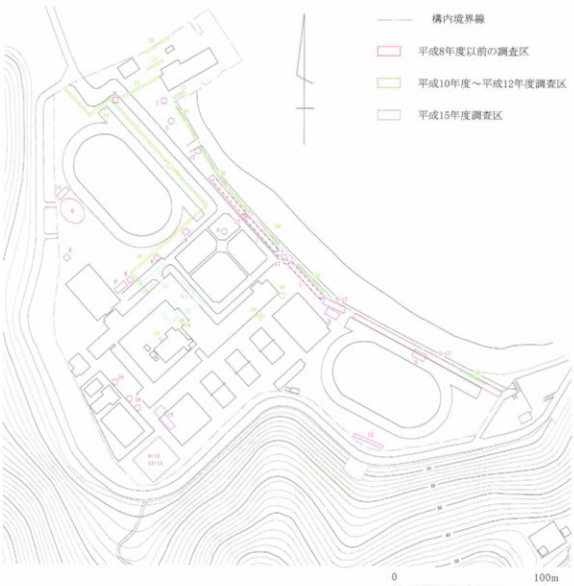


図 30　山口大学光構内調査区位置図

第2章　平成15年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

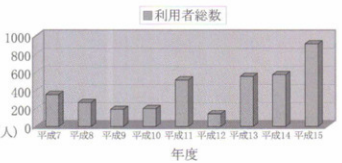
当館は、昭和52年(1977)設立以降、山口大学構内が所在する各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他、年に1回から2回の企画展示、教育活動としては年に1回の市民対象の公開講座の開催、また学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成15年度の当館利用者総数は913名であるが、過去8年間の当館利用者総数の推移を見てみると、年度毎の多少の増減はあるものの増加の傾向にあり、近年は平均500名の利用者を迎えていることがわかる。

この背景には、近年の埋蔵文化財に対する世間の高い関心は言うまでもないが、当館が学内のみならずより広い範囲での地域連携を促進してきた結果が反映されているものと考えたい。

表9　埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913



第1節　資料館における展示公開活動

第19回企画展「吉田遺跡と平川の遺跡」　　後援　山口市教育委員会

当館では、昭和63年度より、毎年1回から2回企画展を開催している。今年度は、平成15年11月2日から同年12月19日までの期間、資料館展示室において第19回企画展を開催した。今回は、山口大学吉田構内が所在する山口市平川地区の埋蔵文化財をテーマとして取り上げた。

展示内容は、当館が永年にわたり調査・研究を行ってきた吉田遺跡の出土資料を中心に、山口市教

写真43　第19回企画展ポスター

写真44　第19回企画展の展示模様

育委員会、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター、山口県立博物館、山口県文書館、広沢寺（山口市平川地区に所在）の協力を得て、平川地区に分布する諸遺跡の出土資料を展示し、それとともに遺跡の調査写真や解説文をパネル展示することにより、旧石器時代から江戸時代までの平川地区の歴史を学習できるものとした。

企画展開催期間中の観覧者数は225名におよび、観覧者からは、「小規模ながらまとまりのある貴重なものを分かり易く展示してあり興味深かった」「身近にこんなものが埋まっていたなんてすごい」などの感想とともに、「一つの時代をほりさげた展示も、小さな館ならではの催しになるのでは？」「更にひろく一般に資料館展示について知らせ、活用して下さい」などの意見も寄せられた。

当館では、長年にわたる埋蔵文化財の調査・研究の成果を生かし、今後とも「実物展示」を最大の特徴とした企画展を開催していく所存である。

第2節　資料館における社会教育活動

第3回公開授業「山口の歴史にふれる－考古学からみた平川－」

当館は、平成13年度より、年に1回市民を対象とした公開授業を行ってきた。この授業は、やや難解な印象のある考古学や埋蔵文化財をより身近なものに感じてもらうことを目的としたものである。

第3回目となる今年度は、山口大学吉田構内が所在する山口市平川地区をテーマとして、考古学的な視点から平川の歴史を学ぶというテーマで授業を行った。

写真 45　土器の拓本に挑戦！

写真 46　昔の生活を想像して絵を描こう

写真 47　傑作のできあがり！

授業は平成15年11月8日に行った。授業には山口市平川地区在住の市民だけでなく、市内各地から、遠方は宇部市から総勢14名の参加があった。

当日の授業内容は、午前の部では遺跡の発掘調査の方法を学び、実際の発掘調査の結果、平川地区ではどのような歴史が解明されてきたのかを学習した。その後は、発掘調査で実際に出土した土器を用いて、拓本を採る体験学習を行った。午後の部では、吉田キャンパスの北に隣接する「日吉神社横穴墓群」の見学を行い、さらに資料館展示室において企画展示中の「吉田遺跡と平川の遺跡」を観覧し、実物の遺跡・遺物から平川地区の歴史を学習した。

最後に1日の授業をふまえ、吉田構内の遺跡保存公園で「昔の人々の生活」というテーマで絵を描いた。どの絵も大変な傑作となり、無事に1日の授業が終了した。

授業を終えた参加者からは、「専門的な話が聞けてよかった」「とてもわくわくした」という感想とともに、「平川地区のことだけではなく、他の地区のことも知りたい」「土器の破片の接合作業がしてみたい」などの声も聞かれた。

今回の公開授業は、考古学および埋蔵文化財の調査方法を学び、学問的な視点から実物資料を観察し、昔の人々の生活を復元するという、我々埋蔵文化財保護に携わる人間がこれまでに学び現在実践している方法を、概略的に1日で行うものであった。しかしながら、小学生の参加者にはやや難解なものとなり、また考古学・歴史学に造詣の深い参加者からは、さらに専門的な内容を求められるなど、授業内容に大きな課題を残した。当館としては、今後とも授業内容や対象とする年齢層等の検討を行い、さらにこの事業を発展させていく必要を感じている。

「山口ふるさと大学」における講演

郷土の様々な歴史を学ぶ市民団体である『山口ふるさと大学』からの依頼を受け、平成15年11月9日に山口大学吉田構内大学会館会議室にて講演を行った。受講者は7名であった。

講演内容は、「山口大学構内吉田遺跡について」と題し、過去の調査で明らかになった旧石器時代から江戸時代までの吉田遺跡の姿を、画像を交えながら説明した。その後は、資料館展示室にて企画展の観覧、吉田構内遺跡保存公園の見学を行った。

このような市民団体からの依頼は、当館の存在が学内を超えてより広範囲に周知されてきたこと示すものである。当館としても、地域との連携が今後の大きな課題・目標となるところであり、今後とも積極的な対応を行いたいと考えている。

写真48『山口ふるさと大学』での講演風景

写真49 遺跡保存公園を見学

山口市立平川小学校における授業

山口市立平川小学校の開校130周年記念事業の一環として授業の依頼を受け、平成16年1月23日、平川小学校6年1組教室にて生徒(4年生 ー 6年生、約30人)を対象に、「ひらかわの大昔にドキドキ」というタイトルで授業を行った。

社会の授業として「日本の歴史」を学ぶ前の学年の生徒も参加していたため、授業は主に発掘調査で実際に出土した遺物を用いての学習となった。山口市教育委員会の協力のもと、吉田遺跡・西遺跡・神郷大塚遺跡・小原遺跡といった平川地区の遺跡出土資料を展示し、それらを観察し、実際に手で触れて昔の人々の生活を想像するという内容であったが、生徒からは盛んに質問が飛び交い、熱気にあふれる授業となった。

授業後には、平川小学校5年生による報道番組制作の授業の一環として、3回にわたり当館が取材を受けるなど、地域における当館の存在意義に新たな一面が加わる結果となった。

写真50 平川小学校での授業風景

写真51 土器にふれる平川小学校生徒

第3節 その他の活動

「日韓交流史理解促進事業」大韓民国学芸研究士による施設見学

山口県教育委員会が大韓民国と行っている日韓交流史理解促進事業では、大韓民国の文化財関係者による山口県内の主要文化施設の視察が行われている。当館は平成13年度より視察に協力しており、今年度は平成15年11月28日に学芸研究士2名が来館した。

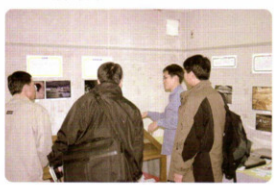


写真52 展示を見学する学芸研究士

今回の視察者は、羅東旭氏(大韓民国釜山広域市立博物館/学芸研究士)、河炳厳氏(大韓民国福泉洞博物館/学芸研究士)である。当館は、企画展示とともに吉田構内の遺跡保存地区の説明を行った。説明に対して、両氏とも大変熱心にメモを取られていた。また、当館所蔵品の無文土器、韓式系土器等に対して、大韓民国の埋蔵文化財についてご教示いただいた。短時間ではあったが、相互の交流を深めることができた。

付篇

光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物

横山　成己

1. はじめに

山口大学埋蔵文化財資料館は、平成15年度に山口大学教育学部附属光小学校において発掘調査を実施した[註1]。山口大学光構内は山口県東南部、光市室積の陸繋島（過去において島であったと考えられる峨嵋山が島田川の土砂運搬作用によって半島状に本土と連結した）の北縁海岸部に所在しており、御手洗遺跡・月待山遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置している。

この両遺跡のこれまでの調査・研究状況に関しては、月待山遺跡はその範囲の大部分が瀬戸内海国立公園内に位置するため現在まで正式な発掘調査は行われておらず、その性格も不明瞭な点が多い。一方御手洗遺跡は山口大学埋蔵文化財資料館の継続的な調査により、複合遺跡としての性格が徐々にではあるが明らかになりつつある。実は、両遺跡は過去において「月待山遺跡」として一括されていた時期があった。

本稿では、月待山遺跡から御手洗遺跡が分離された経緯を振り返るとともに、御手洗遺跡として分離される契機となった教育学部附属中学校体育館建築工事の際に発見された遺物の紹介を行う。

2. 月待山遺跡の発見

月待山遺跡の発見は、昭和25年(1950)にまでさかのぼる。ここで発見の経緯を振り返ると、現在山口大学名誉教授である小野忠　氏が山口大学教育学部光分校（教育学部附属光小・中学校）の海岸を散策中に土師器の散布を認めたことに端を発し、同年と翌年にかけて光分校の学生と共に踏査が実施された。その調査成果は『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告一』（以下『島田川』と略記）に詳しく記載されている[註2]。調査成果の概要を記すると、踏査の結果土器類の分布は峨嵋山の東北嶺に当たる標高20m余りの月待山付近を中心として、西は教育学部附属光小学校付近から、東は半島の突端部である象鼻岬鉤状砂嘴の中央部にまでわたり、分布域の東西範囲が約500mにおよぶことが判明した。特に月待山の狭い平坦面付近に濃密な土師器の包含層が存在し、一部斜面に露出してたようである。また、この包含層地点から南方約30mの高みに人工的につくられた平坦面があり、この地を取り巻く北半には段状に狭い平坦面がつくられ、西側に小円礫の堆積層があって微細な土師器の破片を包含しており、過去に採取された円筒埴輪片らしき遺物の存在から、この地に古墳が存在している可能性が示唆されている。

月待山遺跡は、その範囲がほぼ国立公園敷地内であるため考古学的な発掘調査は行われることなく年月を経たが、昭和40年(1965)11月22日、その分布域内に所在する山口大学教育学部附属光中学校の体育館建築工事中に、同校の教諭であった増本忠一・福本幸夫両氏によって多量の遺物が発見されたのである。

3. 御手洗遺跡の発見

結果的にこの発見が月待山遺跡から御手洗遺跡を分離させる契機となったのであるが、ここではさらに詳しくその経緯を検討することにする。

そもそも、現在の山口大学光構内での埋蔵文化財の発見は、小野氏の分布調査を遙かさかのぼる昭

和7年(1932)9月のことである。当時、山口大学教育学部附属光小・中学校の前身である山口女子師範学校教諭吉田氏が、除草の際に校庭の東南隅(現在の中学校グラウンド丘陵側付近か)において弥生時代の蛤刃石斧[2]を発見した。その後、上述したように小野氏による海岸部での遺物の採取がなされ、丘陵部・海岸部の踏査が実施された。その結果、月待山および光構内周辺に広く遺物が散布している状況が明らかとなり、その分布域を覆う範囲が「月待山遺跡」として発見・認識されるに至ったのである。

『島田川』に掲載されている月待山遺跡の遺物を見てみると、現在の視点からは概ね古代から中世に所属する土師器であるが、角状把手片などやや時代のさかのぼりうる資料も見られる。また、図示されてはいないものの記述として象鼻岬(室積半島の先端部)において祝部式土器(須恵器)4点を採取したことが記されている。

つまり『島田川』刊行時点で認識されていた月待山遺跡とは、複数の時期の遺物が広範囲に散布している分布域としての遺跡の一面と、月待山の狭い平坦面付近の濃密な土師器包含層を中心として近隣に古墳の存在が予想できる地点、換言すると時期および遺構の種別を特定しうるポイントとしての遺跡の一面の両者を包括したものであったと言える。

以上の遺跡の認識状況は、昭和40年の光中学校体育館建築工事まで変わらず引き継がれるが、体育館建築工事の際に遺物包含層を発見した福本氏は、氏の著書中に当時の月待山遺跡の性格について以下のように記述している[3]。

> 本遺跡(筆者注:御手洗遺跡を示す)は、従来「月待山遺跡」の中に含まれていた。なぜならば、月待山には土師器の包含層があり、この包含層は標高20mの高見にあって、みたらい湾の崖面にかかっている。したがって、ここを中心とした遺物が付属海岸一帯に潮流によって運搬せられたものと考えられていたからである。
>
> しかし、付属海岸一帯(月待山の西端から西北へ弧状海岸が約330m)に散布するこれらの土器片の中には、月待山の土師器以外の種類の土器が多く含まれている点に疑問が残されたまま今日に至っているのであった。
>
> すなわち、月待山の包含層からは土師器だけしか検出しないのに、付属海岸には、同包含層からは検出しない土師器の種類が散布している外、須恵器が含まれているということである。

この福本氏の月待山遺跡に対する疑問が、まさに光中学校体育館建築工事の際に解明したのである。この工事の際に行われた調査の成果は、福本氏自身の記述を要約すると[4]、

①附属中学校体育館敷地約600㎡の範囲からは多量に遺物が出土し、遺物包含層が存在する
②遺物発見時には工事掘削が終了していたため遺物の出土状況は明らかではないが、各時期の遺物が混在していたと思われる。
③遺物包含層の層厚は概して同じ50㎝であり、包含層は黒褐色の海成砂礫層である。
④遺物の包含状態は、海岸に近い北東部が濃密である。
⑤出土遺物には、縄文晩期の口縁部片1点・弥生前期の蓋1点・弥生中期の土器2点・弥生後期の様相の土器3点・土師器多数・須恵器多数・中世と思われる瓦器4点がある。

となる。福本氏は上記の調査成果から、月待山遺跡の海岸部に散布している遺物は、月待山土師器包含層からの流出だけではなく、縄文時代から中世におよぶ長期間の遺物を包含する中学校体育館の包含層も母体となっており、むしろその方が多いと判断するに至った。

また、昭和7年に採取された弥生時代の石斧と月待山包含層は時期的に結びつかないが、この中学校体育館包含層とは結びつくとの観点から、従来は月待山遺跡に含まれて考えられていた光附属中学校グラウンドを「御手洗遺跡」と呼ぶことになったようである。この時点をもって、月待山遺跡として認識さ

れていた遺跡の範囲から御手洗遺跡が分離することとなった。現在、月待山遺跡と御手洗遺跡は福本氏が地形等から推定した黒褐色砂礫遺物包含層の範囲の東限を境界線として区分されている。

4. 光中学校体育館出土の遺物

それでは、光中学校体育館建築工事中に発見された包含層出土遺物群は、具体的にどのような種類のもので構成されているのだろうか。

福本氏は自身の著書中に、御手洗遺跡包含層から出土した遺物の写真を20点掲載しており、時代別・種類別に各遺物の説明を行っている。その文末には、「※出土品は付属光小学校に保管中」と記されている。

筆者は平成15年度に附属光小学校で発掘調査を実施した際に、この昭和40年の出土資料の再整理を思い立ち、附属小・中学校の教職員に資料の探索を依頼した。その結果、須恵器3点、弥生土器および土師器17点、瓦1点が発見された。しかしながら、大多数の遺物には出土地・出土年月日などの注記がなされておらず、わずかに弥生土器2点に「岡図」と読める注記がなされているだけであった。また、発見された遺物と福本氏が掲載している遺物写真を見比べても、同一個体と思われるものは見あたらなかった。さらに福本氏の著書中には光市の多数の遺跡が紹介されているが、氏が発見した遺物の多くは「付属光小学校に保管中」と記されているため、これら無注記の遺物を御手洗遺跡出土品として取り扱うことはできなかった。

その後、山口大学埋蔵文化財資料館員の山畑直彦から、『光市文化センター』展示室に御手洗遺跡出土遺物が展示されているという情報を受け、資料調査へ伺うこととなった。調査の結果、確かに展示中の遺物は福本氏が著書中に掲載している遺物であり、その他にも収蔵室に「御手洗」と記された遺物コンテナが存在することが明らかとなった。後に福本氏に経緯を窺うと、光市文化センターが設立された際に、小野氏と相談の上、より多くの市民が文化財と触れ合うことができるように附属光小学校に保管されていた遺物を光市文化センターに寄贈されたそうである。以上のような経緯を経て、光市文化センターの御厚意により、遺物を借用・調査させて頂くことができた。

資料の調査方法は、まず遺物への注記の有無・種類を確認することから始めた。遺物中には無注記のものも存在したため、慎重を期して調査対象から除外した。注記の種類としては、中学校体育館の調査が行われた「40.11.22.」という日付が記されたものや、「付中G」(Gはグラウンドの略と考えられる)と記されたものがあり、これらは中学校体育館で検出された黒褐色砂礫遺物包含層出土品と見なしても良いと判断した。その他に、「御手洗」・「みたらい」・「み」など御手洗遺跡出土と考えられるが出土年月日が不明なもの、また年月日が記載されていても「40.4.25」や「40.10」など調査日以外のものは、御手洗遺跡出土という認識に留めることとした。この注記内容の差については、後に福本氏に直接原因を窺ったが、なにぶん昔のことなので記憶が曖昧であり、遺物の整理途中で中学校体育館包含層出土品とその他御手洗遺跡採集品が不明確になったのかもしれないという回答を頂いた。筆者の資料分類には快諾を頂いたので、ここでは資料を「中学校体育館包含層出土遺物」「その他の御手洗遺跡出土遺物」と区分し報告する。なお、福本氏の著書での掲載の有無に関しては、遺物観察表内に示す。

a. 中学校体育館包含層出土遺物

1は縄文土器浅鉢口縁部片。外面口縁端部下に2条沈線を施す。内面を密に磨く。縄文時代後期末の所産であろう。

2は弥生土器盛蓋。小型品であり、つまみの一部と周縁の一部を欠失する他はほぼ完形である。双頭

のつまみを有し、周縁対角線上2カ所に紐孔2個を穿つ。外面は丁寧にミガキを行った後、タマキ貝により2条単位3カ所に同心円を施文する。同心円文間の文様帯には同じくタマキ貝により鋸歯文を充填する。弥生時代前期。3は弥生土器甕体部片。現状で2条の沈線を有する破片である。調整は外面縦ハケ、内面ナデ。弥生時代前期。4は弥生土器壺口縁部片。頸部沈線部分で破損している。調整は口縁部内外面横ナデ。頸部は外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ。弥生時代前期。5は弥生土器壺頸部もしくは高坏坏部片。現状で外面に斜線文が施されている。弥生時代後期か。6は弥生土器壺底部。平底であり、外面を粗く磨く。弥生時代前期から中期。7は弥生土器甕底部か。底部径は小さく、やや上げ底となっている。外面は丁寧なナデ調整。弥生時代後期。8は壺底部片。大型品の底部であり、丸底に近い平底になるものと思われる。弥生時代中期から古墳時代か。

9は土師器甕口縁部～体部片。やや内湾する口縁部を有する。調整は口縁部内外面横ナデ。体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のケズリ。古墳時代前期から中期か。10は土師器甕もしくは壺口縁部片。口縁端部内面を肥厚させる。外面は横方向のミガキ、内面は横ナデ。11は土師器甕口縁部片。頸部から「く」の字状に屈曲して開く形態である。外面は横ナデ、内面は横方向のハケ。古墳時代前期から中期。12は土師器小型壺。外面丹塗りであり、内面は粘土接合痕が明瞭に残る。外面縦方向のハケ、内面ナデ。古墳時代。13は器種不明土師器。形状から竈形土器の基底部片である可能性が高い。外面は斜め方向の平行タタキ、内面は横方向のハケ。14も器種不明土師器。外面はハケ後ナデ、内面はケズリ。端部にハケ調整が残る。やはり竈形土器片か。26は須恵器甕頸部片。大型品であり、頸部上方に現状で3条の沈線が廻る。沈線下には波状文を施す。調整は外面カキ目およびナデ、内面は横ナデ。古墳時代中期から後期。33は須恵器甕もしくは壺体部片。外面平行タタキおよびカキ目、内面は同心円当て具痕がナデ消されている。

b. その他の御手洗遺跡出土遺物

15は弥生土器壺底部。底端部は欠失しているが、平底になるものと思われる。調整は外面が縦方向のハケ、内面はナデ。弥生時代前期から中期。16は弥生土器壺底部片。丸底に近い平底に復元される。外面調整はナデであるが部分的に縦方向のハケが残る。内面はナデおよび縦方向のケズリ。弥生時代中期か。17は弥生土器甕底部。底端部をやや外方向に突出させた上げ底である。調整はない外面ナデ。弥生時代後期。

18は土師器甕口縁部。やや内湾する口縁形態であり、外面は強い横ナデにより凹状にくぼむ。やや異質の形態であるが、古墳時代前期から中期に該当する資料であろう。19は須恵器模倣土師器の甕口縁部と考えられる。精選した粘土を用いている点において他の土師器とは異なる。調整は内外面横ナデ。古墳時代中期から後期か。20は土師器高坏坏部片。脚部との接合のための棒状刺突痕が残る。外面調整は放射線状のミガキ。内面は剥離が激しく観察できない。古墳時代中期。21は土師器小型壺底部。厚手の平底に近い丸底であり、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。外面には部分的に丹塗りが残る。22・23は土師器甕体部片。調整は外面ハケ、内面ナデ。両者とも外面に煤が付着している。24は外面に丹塗りを施した土師器甕体部片。調整は外面ハケ、内面ナデ。25は土師器甕頸部から体部片。調整は外面横方向の平行タタキ、内面はナデ。古墳時代前期か。27～32・34・35は須恵器甕もしくは壺体部片。外面カキ目および平行タタキ、内面は同心円当て具痕がナデ消されている調整方法は中学校体育館包含層出土遺物33と同様であり、同一個体である可能性がある。36～38は須恵器体部片であるが器種不明。同一個体と考えられるが、器形から小型壺などが考えられる。調整は内外面横ナデ。39・40は角状把手。いずれもナデ調整が行われており、断面形態は39がいびつな方形、40が楕円形である。

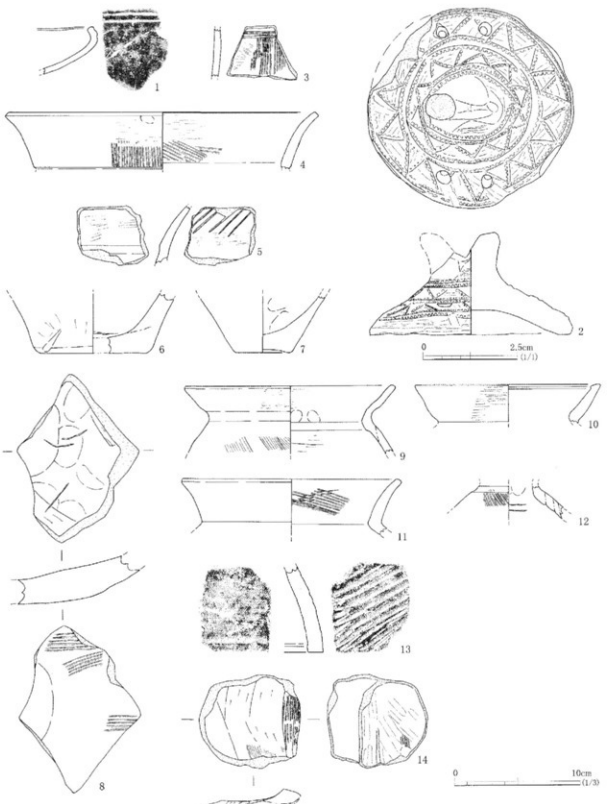


図 31 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物①(中学校体育館包含層出土遺物)

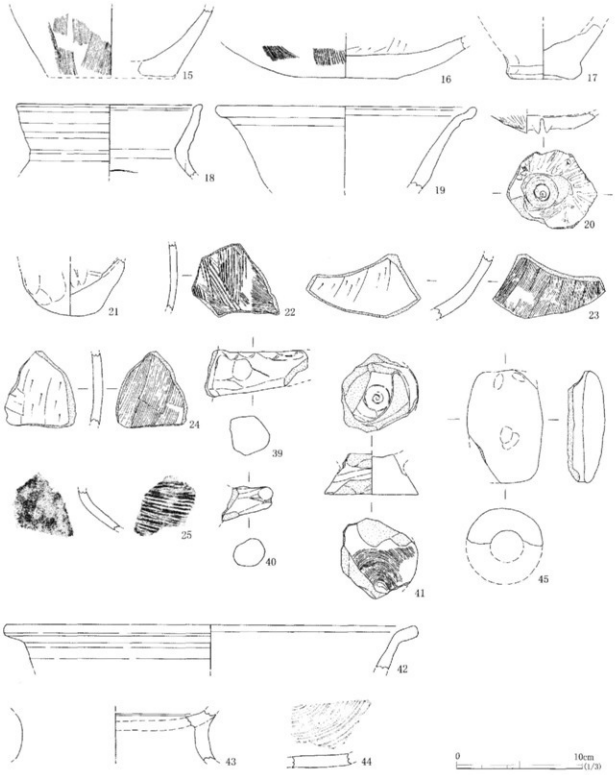


図 32 光市文化センター所蔵の御手洗移籍出土遺物②

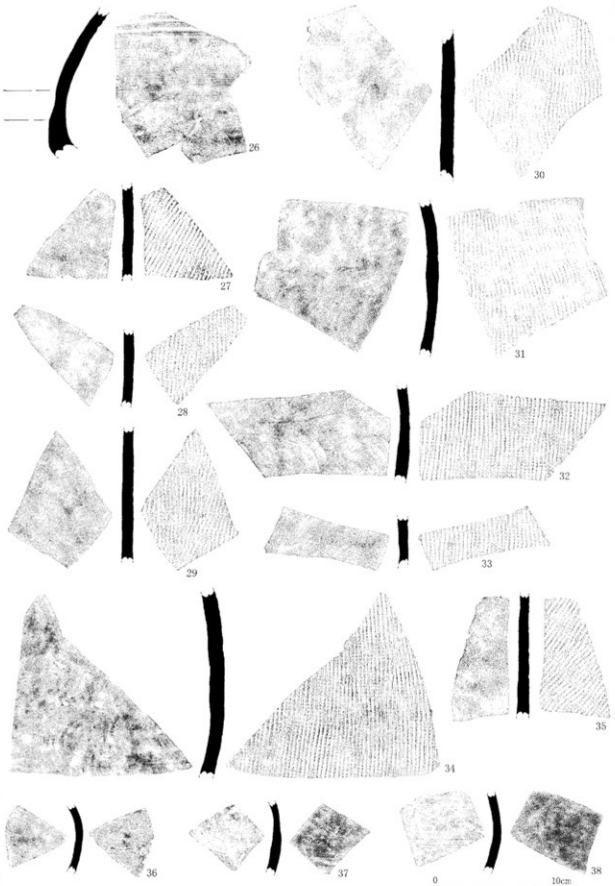


図 33 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物③(中学校体育館包含層出土遺物を含む)

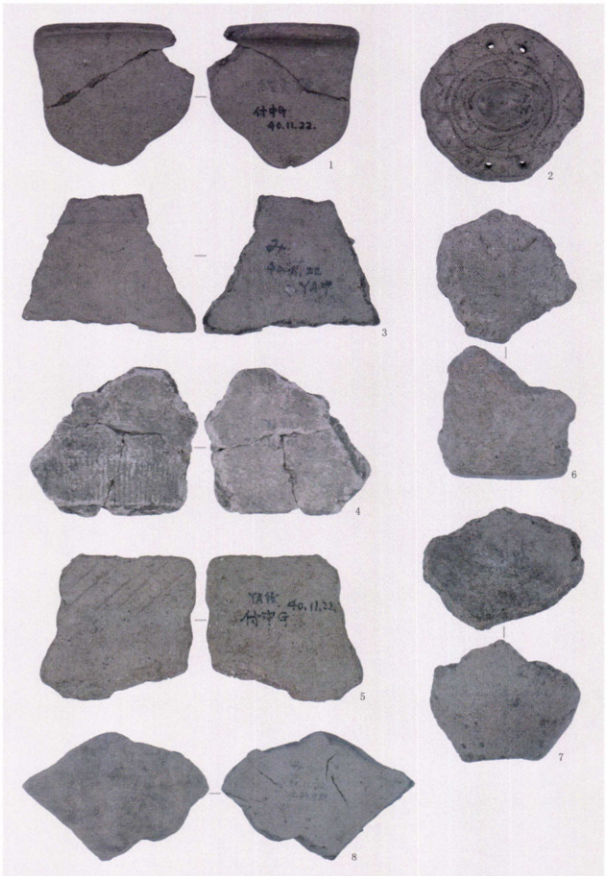


写真 53　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物①(中学校体育館包含層出土遺物)

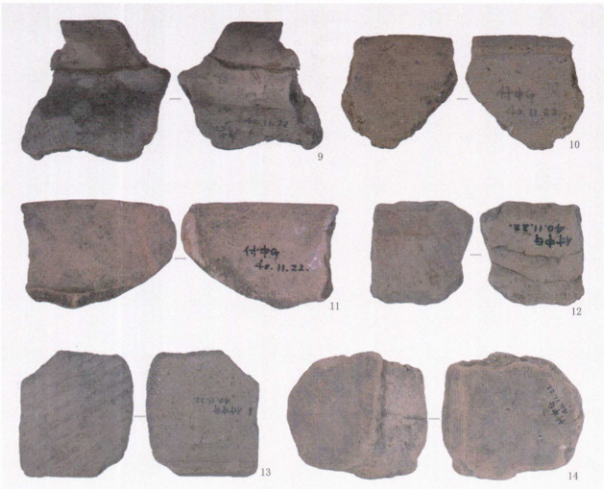


写真 54　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物②(中学校体育館包含層出土遺物)

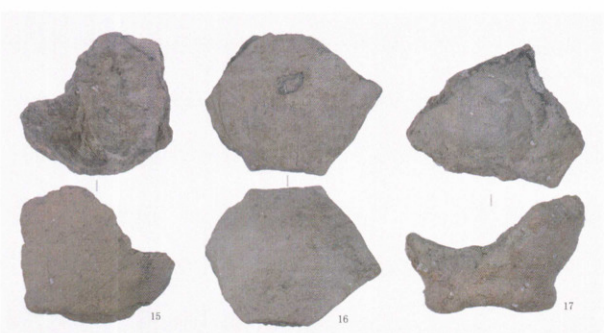


写真 55　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物③

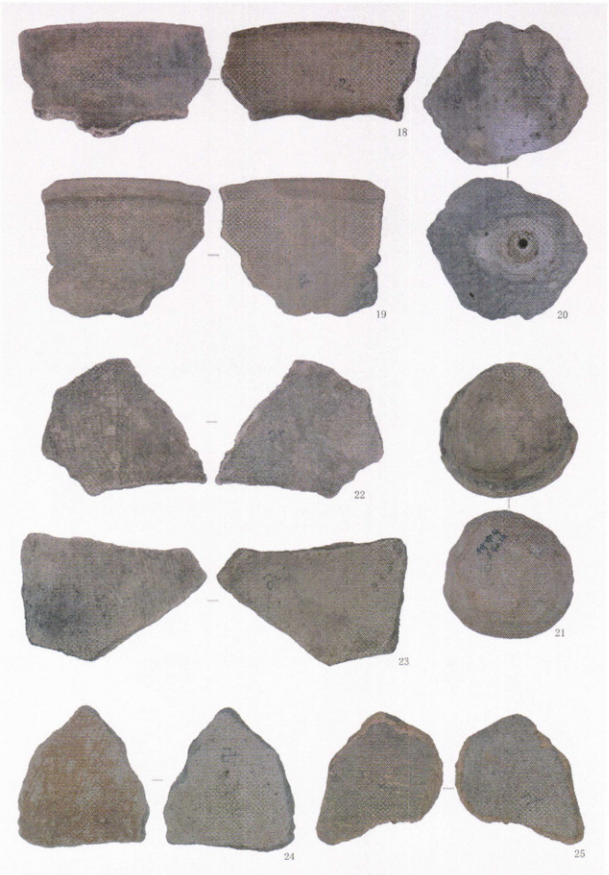


写真 56　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物④

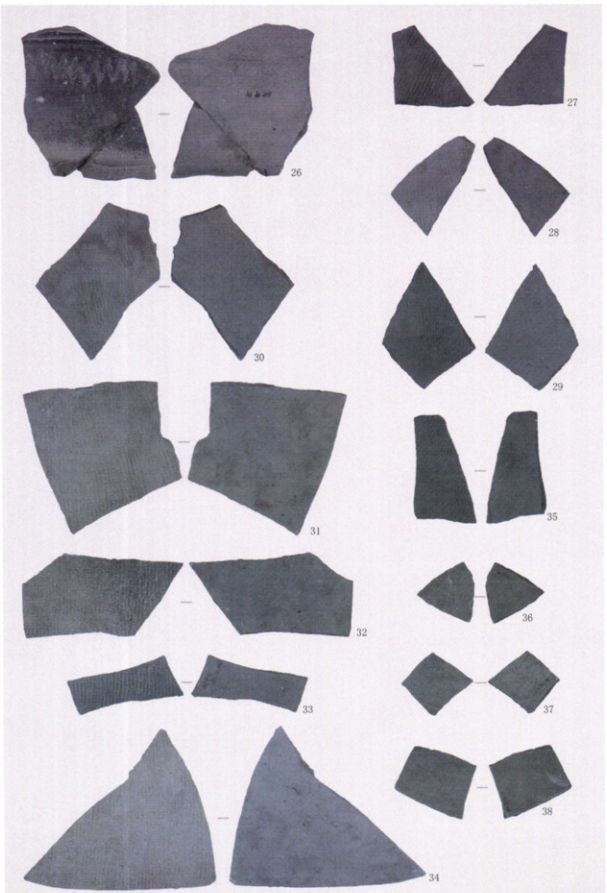


写真57　光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物⑤(中学校体育館包含層出土遺物を含む)

写真58 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物⑥

表10 光市文化センター所蔵御手洗遺跡出土遺物観察表

法量( )は復元値

遺物番号	器種	部位	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	注記	福本氏著書の掲載	備考
1	縄文土器 浅鉢	口縁部		①②純い黄橙色(10YR6/3)	精緻 0.1～0.5mmφの細砂粒 少量混ざる	縄文晩 付中G 40.11.22.	○	
2	弥生土器 壺蓋		①5.4 ③2.7	①②純い黄橙色(10YR6/4)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.	○	タマキ貝腹部による同心円文・鍬衝文
3	弥生土器 甕	体部		①橙色(7.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	み 40.11.22 YA中	○	
4	弥生土器 壺	口縁部	①(20.2)	①②浅黄色(2.5Y7/3)	精緻 0.5～3mmφの砂粒 少量混ざる	み 40.11.22 YA後	○	
5	弥生土器 壺または高坏	頸部または口縁部		①②にぶい橙色(7.5Y7/4)	精緻 0.1～1mmφの細砂粒 少量混ざる	YA後 40.11.22. 付中G	○	
6	弥生土器 壺	底部	③(8.4)	①橙色(7.5YR6/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	やや粗 0.1～3mmφの砂粒 やや多く混ざる	40.11.22 み YA中	○	
7	弥生土器 甕か	底部	③(4.6)	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰褐色(7.5YR6/2)	精緻 0.1～0.5mmφの細砂粒 少量混ざる	み 40.11.22 YA後	○	
8	土師器 壺	底部		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	み 40.11.22. 土師中期	○	底部外面に砂粒多く付着
9	土師器 甕	口縁部～体部	①(16.8)	①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 やや多く混ざる	み 40.11.22 土師中半	○	
10	土師器 甕か	口縁部	①(14.4)	①②橙色(7.5YR7/6)	やや粗 0.5～1mmφの砂粒 やや多く混ざる	付中G 40.11.22.		
11	土師器 甕	口縁部	①(17.4)	①②橙色(7.5YR7/6)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.		
12	土師器 壺	頸部～体部		①②にぶい橙色 (7.5YR7/3)	精緻	付中G 40.11.22.	○	外面丹塗
13	土師器 鼸形土器か	基底部か		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻	付中G 40.11.22.		
14	土師器 鼸形土器か			①②橙色(7.5YR6/6)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.		
15	弥生土器 壺か	底部～体部		①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	やや粗 0.5～3mmφの砂粒 やや多く混ざる	み		
16	弥生土器 壺	底部	③(8.2)	①②にぶい黄橙色 (10YR6/4)	精緻 0.5～3mmφの砂粒 多く混ざる	み		
17	弥生土器 甕	底部	③2.9	①明赤褐色(2.5YR5/6) ②浅黄色(2.5Y7/4)	精緻 0.5～3mmφの砂粒 やや多く混ざる	み		
18	土師器 甕	口縁部	①(14.6)	①②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精緻 0.5～1.5mmφの砂粒 少量混ざる	み		外面煤付着
19	土師器 甕	口縁部	①(23.0)	①②橙色(7.5YR7/6)	精緻	み		須恵器模倣
20	土師器 高坏	坏部		①②褐灰色(10YR5/1)	精緻 0.1～1mmφの細砂粒 少量混ざる	み	○	
21	土師器 小型壺か	底部～体部		①②橙色(5YR6/6) (丹塗)明褐色(2.5YR5/8)	精緻 0.5～8mmφ粗の砂粒 少量混ざる	付中G S40.10.	○	外面丹塗
22	土師器 甕	体部		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	精緻	み		外面煤付着
23	土師器 甕	体部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②黄褐色(10YR5/6)	精緻 0.5～2mmφの砂粒 少量混ざる	み		外面煤付着
24	土師器 甕	体部		①(丹塗)明赤褐色 (2.5YR5/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精緻	み		外面丹塗

遺物番号	器種	部位	法量(cm) ①口径 ②底径 ③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	注記	福本氏著書の掲載	備考
25	土師器甕	頸部～体部		①②灰黄色(2.5YR6/2)	精緻	み		
26	須恵器甕	頸部		①暗灰色(N3) ②灰色(N6)	精緻 0.1～5mmφの細砂粒 少量混ざる	付中G	○	
27	須恵器甕	体部		①②灰色(N6)	精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み	○	
28	須恵器甕	体部		①青灰色(5B6/1) ②灰色(N5)	精緻 0.1～3mmφの細砂粒 少量混ざる	みたらい		
29	須恵器甕	体部		①②灰色(N5)	精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
30	須恵器甕	体部		①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰色(N6)	精緻 0.1～1mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
31	須恵器甕	体部		①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰色(N5)	精緻 0.1～3mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
32	須恵器甕	体部		①灰色(N4) ②灰色(N5)	精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
33	須恵器甕	体部		①灰色(N4) ②灰色(N5)	精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	付中G 40.11.22.	○	
34	須恵器甕	体部		①褐灰色(10YR6/1) ②灰色(N5)	精緻	み		
35	須恵器甕	体部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	精緻 0.1～2mmφの細砂粒 少量混ざる	み		
36	須恵器	体部		①灰色(N6) ②灰色(N7)	精緻	みたらい		
37	須恵器	体部		①灰色(N6) ②灰色(N7)	精緻	みたらい		
38	須恵器	体部		①②灰色(N7)	精緻	みたらい	○	
39	土師器 角状把手	把手		にぶい黄橙色(10YR6/4)	精緻 0.5～3mmφの砂粒 少量混ざる	み		
40	土師器 角状把手	把手		橙色(7.5YR7/6)	精緻 0.5～2.5mmφの砂粒 少量混ざる	み		
41	土師器 台付皿	台部		にぶい橙色(7.5YR7/4)	精緻	み		台底部糸切り
42	瓦質土器 鍋か	口縁部	①(32.2)	①黒色(7.5YR2/1) ②橙色(7.5YR7/6)	精緻	みたらい 瓦器 40.4.25.	○	
43	瓦質土器 火鉢か	台部～体部		①②にぶい黄橙色 (10YR6/3)	精緻	みたらい 40.4.25 瓦器	○	
44	瓦質土器	底部		①②褐灰色(10YR5/1)	精緻	みたらい 40.4.25 瓦器	○	
45	土錘		全長8.9 最大径(6.0) 孔径(2.6)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	精緻 0.5～5mmφの砂粒 多量混ざる	み み	文章中に記述	海岸汀線散布地で採取

41は土師器台付皿の台部片。底面には糸切り痕が見られる。古代末から中世初頭か。42～43は瓦質土器。42は鍋の口縁部片。43は底部から脚部片であるが、器種不明。火鉢か。44は底部片。内面に回転させた強いハケ目痕が残る。45は土師質焼成された土錘。全長8.9cmの大型品であるが、これは福本氏により海岸汀線散布地で採取されたことが記されている。

5. 中学校体育館包含層の性格（図34・35）

光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物の整理を行った結果、中学校体育館で検出された黒褐色砂礫遺物包含層には現状では明確な古代以降の遺物が存在しないことが明らかとなった[注7]。この事実には、非常に大きな問題が内包されているものと考える。

御手洗遺跡は、昭和40年の発見以降山口大学埋蔵文化財資料館によって継続的な調査が行われてきた。その結果、徐々にではあるが複合遺跡としての性格が明らかとなりつつある。遺構面が確認された主な調査を挙げると、平成2年(1990)に附属小学校体育館北東側で実施された調査（図34地点①）では、上下2面にわたる古墳時代後期の遺構面が検出されており、遺構としては土壙が確認されている[注8]。平成3年(1991)から平成4年(1992)にかけて附属中学校武道館建設地で実施された調査（図34地点④）では、中世遺構面と共に同じく古墳時代後期の遺構面が検出され、遺構としては土壙が確認されている[注9]。また平成15年(2003)に小学校校舎周りで実施された調査（図34地点②③）でもやはり古墳時代後期と考えられる遺構面が検出され、土壙、ピット群が確認されている[注10]。これらの地点で検出された遺構の出土遺物は極めて少なく、細片資料が多いためその所属時期に関しては慎重でなくてはならないが、時期が推定できる数少ない資料（土師器・須恵器）から見ると、6世紀後半代を中心とする遺構群である可能性が高い。また、これらの地点では、遺構面を覆う堆積土および遺構面が形成されている基盤層中から遺物が出土するが、時期の特定が可能な遺物はいずれも古墳時代後期後半から古代・中世・近世のものであり、弥生時代以前の遺物を含まないことが特徴と言える[注11]。

一方、中学校体育館包含層出土遺物を見ると、縄文時代後期末の土器を1点含むが弥生時代から古墳時代にかけてのものが中心をなしており、土師器資料には確実に6世紀後半にまで時期の下る資料と言えるものはない。また須恵器資料(33)の特徴としては、甕もしくは壺体部内面の同心円当て具痕が丁寧にナデ消されており、参考資料としての取り扱いとなるがその他の須恵器資料（27～32、34・35）も同様の特徴が見られる。対照的に①～④地点出土の須恵器甕もしくは壺体部内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。

山口大学埋蔵文化財資料館は、この黒褐色砂礫遺物包含層と同一の堆積層と考えられる土層を平成11年(1999)の立会調査で確認している。調査位置は中学校体育館の北西側に近接する地点であり、福本氏の予想包含層西側限界線に接する位置である（図34地点5）。この調査では、現地表下約145cmで青黒色砂層が検出された。この砂層は層厚が約45cmであったが、層中から大量の遺物が出土した。遺物の種類としては土師器、須恵器類が中心であるが、竈形土器も出土している[注12]。これらの遺物の所属時期に関しては、須恵器蓋坏類で見ると6世紀代初頭の特徴を有しており、包含層形成時期の一つの指標になりうるものと思われる。

以上のような調査成果から考えると、現在までに確認されている古墳時代の遺構の形成年代と、中学校包含層中遺物群の下限年代には、古墳時代の後期（6世紀代）中を境とする年代差が存在する可能性が高いのではなかろうか。換言すると、中学校体育館包含層中遺物群の母体となっているのは、小学校校舎周辺および中学校武道館建物が所在している峨嵋山支丘北面の内湾部に形成された古墳時代

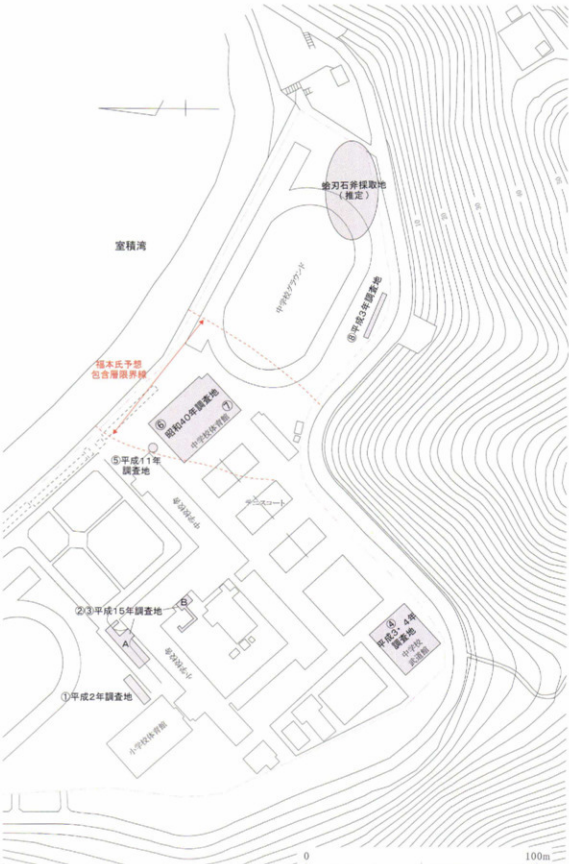


図 34　御手洗遺跡・月待山遺跡主要調査位置図（※註 4 文献第 7 図に現在の地図を合成・加筆）

後期後半の遺構群ではなく、テニスコートや中学校グラウンドが所在する支丘の張り出し部付近からさらに東方にかけての範囲に過去に存在していた弥生時代前期から古墳時代後期初頭の集落等という可能性はないであろうか。

事実福本氏はその著書中に、「包含層は峨嵋山麓（グラウンドの南側）から海岸に向かって、さらに月待山側（グラウンドの東側）から西の校舎側に向かって、それぞれ傾斜しているが、その厚さは概して同じ50cmである。」と記述している。つまり、包含層は同じ厚みをもって南東側から北西側に降下していたということになる。また、氏の記述から昭和40年調査の土層断面を復元したものと、平成11年調査の土層断面を模式化したものが図35下段の土層柱状図である。両調査とも海抜高の測量がなされていないため包含層上面の絶対高は導き出せないが、現状地形は平坦地であり、現地表面の海抜高はおよそ3mである。この柱状図から見ても、やはりこの遺物包含層は西に位置する内湾地形部からの流入堆積ではなく、南部から南東部にかけての丘陵部から流入堆積と考えるのが妥当ではなかろうか。昭和7年の蛤刃石斧採取地が中学校グラウンドの南東部と考えられることも、この推定の補強材料となるものと考えている。

6. まとめ

以上、御手洗遺跡が成立する契機となった昭和40年調査の出土資料を整理すると共に、山口大学埋蔵文化財資料館が現在までに実施した発掘調査成果を用い、現在の視点から中学校体育館黒褐色砂礫遺物包含層がどのように位置付けられるかについて考察を行った。

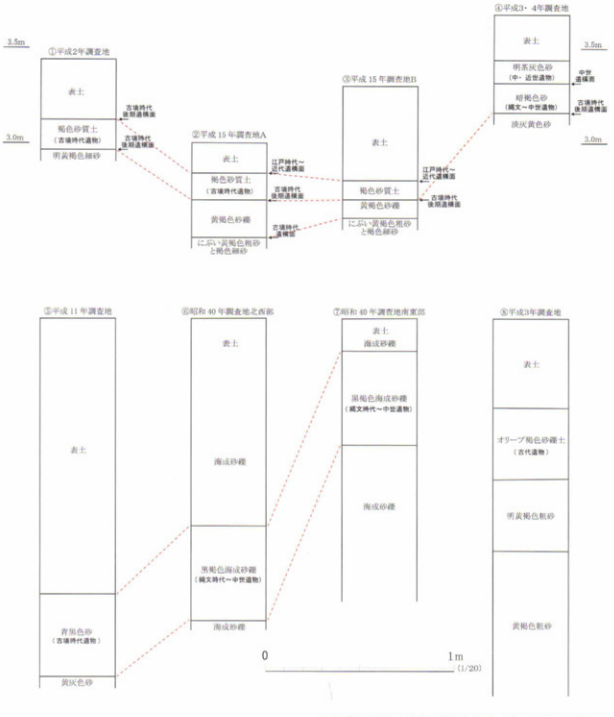
前述したように、そもそも御手洗・月待山遺跡は過去において「月待山遺跡」として一括されていた。しかしながら、月待山の狭い平坦地に形成されている遺物包含層（土師器だけが包含されているらしいが、所属時期などは不明）および古墳と考えられる地点と、海岸域で採取される遺物の内容には大きな違いが見られることもまた事実であった。この疑問点に対し、昭和40年の調査による遺物包含層の確認で一応の解答が得られることとなり、その遺物包含層の南東側予想包含層限界線を持って以東を「月待山遺跡」、以西を「御手洗遺跡」とする見解が生じたのである。

今回昭和40年の調査で出土した資料と山口大学埋蔵文化財資料館がこれまでに実施した調査成果を検討した結果、筆者は山口大学光構内においてはむしろ北西側予想遺物包含層限界線をもって遺跡の内容が区分されるのではないかと推測した。すなわち、北西側予想遺物包含層限界線より南東側のいずれかの地に弥生時代から古墳時代後期初頭にかけての集落等が営まれており、中学校体育館黒褐色砂礫遺物包含層とはその痕跡物が低地に向かい流入・堆積したものとする推測である。またそれと共に古墳時代後期後半には人類の活動域は包含層の南西部に移動したのではないかと考えている。

上記の推測は、多量とは言えない出土遺物が根拠となっていることは自認するところである。今後とも層位的な確認を含め調査・研究を継続したい。

謝辞

本稿を執筆するにあたっては、福本幸夫氏に数々の有益な御教示を頂いた。また光市文化センターの石村正彦・丸岡敦雄両氏を筆頭に、光市文化センター職員の方々には多大なる厚意を頂いた。末筆ながら記してここに謝意を表したい。



※⑤～⑧に関しては、断面図は報告されておらず、文章から復元した柱状図である

図 35 御手洗遺跡・月待山遺跡主要調査地土層柱状図

［註］

1）本書第1章第6節参照

2）小野忠熙（1953）「第Ⅳ章島田川流域の遺跡群」，小野忠熙（編）『島田川　周防島田川流域の遺跡調査研究報告1950-1953』，山口

3）現在山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている。

4）福本幸夫（1966）「Ⅱ光市における先原始時代の遺跡」，福本幸夫（編）『先原始時代の光市』，光（山口）

5）前掲註4　p.76～77

6）福本氏によると、月待山遺跡から御手洗遺跡を分離させる際には小野氏に相談し、指導を得たとのことである。

7）ただし、中学校体育館包含層出土した遺物も工事中掘削終了時の発見であり、層位が保証されているものではないことを付記しておく。

8）河村吉行（1992）「第3章　光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』，山口

9）豆谷和之・田崎美佐（1994）「第3章　光構内教育学部附属中学校武道館新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』，山口

10）本書第1章第6節参照

11）平成3年から4年にかけて実施された中学校武道館建設地での調査では、遺構内埋土から縄文時代前期（曽畑系）の土器片が出土している。

12）この調査の正式報告はなされていないため、調査を担当した山口大学埋蔵文化財資料館員の田畑直彦に調査内容・遺物の出土状況を確認した。

報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぽう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	―平成15年度―
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	1
編著者名	田畑直彦　横山成己
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市大字吉田1677-1 TEL083-933-5035
発行年月日	西暦2005(平成17年)3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
山口大学医学部構内遺跡	山口県宇部市南小串1丁目1-1	35203		36度57分36秒	131度14分52秒	20030801-20030820	76m²	基幹環境整備(煙突)
御手洗遺跡	山口県光市室積8丁目4番1号	35210		33度55分11秒	131度58分12秒	20031120-20031224	88m²	教育学部附属光小学校エレベータ昇降路等新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山口大学医学部構内遺跡	散布地	不明		土師器	
御手洗遺跡	散布地 集落跡	縄文～近世	柱穴・土壙	縄文土器・土師器 須恵器・瓦質土器 陶器・磁器・石器	特記事項

山口大学埋蔵文化財資料館年報
── 平成15年度 ──

平成17年3月31日

編集　山口大学埋蔵文化財資料館
発行　山口大学
〒753-8511　山口市吉田1677-1
印刷　(有)三共印刷
〒759－0204　宇部市大字妻崎開作1953－8

YAMAGUCHI UNIVERSITY
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.1

CONTENTS

Chapter I The project on the Yamaguchi University campus in the 2003 fiscal year 1

Section 1 General outline of the project on the Yamaguchi University campus in the 2003 fiscal year 1

Section 2 Excavations on the Yoshida campus "Yoshida site" 4

Section 3 Excavation on the Shiraishi campus "Shiraishi site" 9

Section 4 Excavation on the Kogushi campus "Yamaguchidaigaku-Igakubukounai site" 10

Section 5 Excavation on the Tokiwa campus "Yamaguchidaigaku-Kougakubukounai site" 13

Section 6 Excavation on the Hikari Campus "Mitarai site and Tsukimachiyama site" 14

Section 7 Excavation on the other Campus 33

Appendix 1 The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2003 fiscal year 34

Appendix 2 List of researches in Yamaguchi University campus 36

Capter II Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities 56

Section 1 Exhibition activities 56

Section 2 Social education activities 57

Section 3 Other activities 59

Appendix Archaeological finds at Mitarai site in Hikari Sity Cultural Center's custody 60

Published by
Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 2005